
開拓者～神の力を持つ者たち～

ストラウド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

開拓者～神の力を持つ者たち～

【Zコード】

Z6631H

【作者名】

ストラウド

【あらすじ】

太陽系が消滅し、地球が幻の星と言われるまでになつた未来。人々は相変わらず戦争を続けている。そんな人々に神は新たな人を与えた。世界を一つにし、戦争のない世界を生み出すために。これは世界を一つにする者と世界を零にする者の戦いである。この世界はすべて神が操つていいはずだった。

プロローグ（1）

宇宙といつ世界の中で文明は誕生、そして滅亡を繰り返しながらも生き続けている。

この宇宙で初めてとなる文明は、自然との調和を一番とする考え方を持っており科学力は乏しかった。そのためか、他の宇宙から飛来したとも言われる高知能生物との侵略防衛戦争に敗退し滅亡する。

のちの文明は、前にも文明と呼ぶことができる文化があつたという証拠を見つけた。そしてその文明を第一次文明と名づけ、自分たちの文明を第二次文明とした。

第一次文明は、第一次文明の調査をする事で技術革新を謀った。

それによつて滅亡「する」とも知らずに。

調査する中で彼らは知つてしまつた。他の宇宙が存在し、他の生物がいることを。

その調査内容はすぐに広がり、世界は困惑し始めた。そしてついに困惑は次第に戦争へと変わり、同盟国どつこの連続した内戦により第二次文明は滅亡する。

そして、時は流れ第三次文明、それは最も長く、最も技術を持ち、最も理想とされる文化を築き上げた。

しかし、技術力は第三次文明に災厄をもたらした。星を一撃で破壊する砲、時空を歪ませるほどのエネルギーの使用、それらの技術は惜しみなく戦争に利用された。斯くして、第三次文明は滅亡した。最後に第三次文明は後世に同じ過ちをさせないため、星を作りその星に自分たちの歴史を残しこの世から消えていった。

その後ついに人々が「世紀」と呼ぶ時代、第四次文明が誕生した。人間は20世紀の間に2度も地球をまきこむ戦争を行つた。第二次世界大戦後、ある国である実験が行われていた。その実験は人間を超える人間、「強化人間」を作るためものだった。

しかしその国の有権者が変わったことで国は乱れ、ついには内戦となり滅亡してしまつた。だがその国は100年、200年後もずっと世界の人々に存在さえ知られることはなかつた。

なぜなら、そこは、第三次文明の歴史と技術が隠されており守られていたからである。

30世紀地球規模の大地震による大陸大移動が起こつた。それによつて隠され続けてきたその国は世界の前に姿を表わしてしまつ。

プロローグ（1）（後書き）

初めての投稿です。更新は遅めになると思っています。どんなことでも良いです感想待っています

プロローグ（2）

人々はそこに100人ほどの研究者を送る。そして「強化人間」制作の実験が行われていたことを知り、また数多くの新しい技術も獲得した。

その中の一つにメモリー・ボックスと思われる物があつた。研究者たちは始め技術に関する物だと考えていたが、その物の内容は、酷く辛い物だった。

無惨にも崩れゆく天に向かつてそびえ立つて超高層建築物。その瓦礫に為すすべもなく呑み込まれる人々。おびただしいほどの血飛沫。絶え間なく聞こえる悲痛な叫び声。一瞬で焼け野原と化す大地。

それは、言葉が通じなくとも伝わるメッセージだった。

技術が最終的にたどり着くところとは、災厄であるということ。

研究者たちは迷わず各国の首相にあの映像を公表した。事態を重く見た首相たちは、すぐに研究者を撤収させる。

しかし、発見当時から開発が進められていた「強化人間」作製は成功しており、すでに100人を越えていた。

完成した「強化人間」と普通の人間を比較すると、身体能力だけの向上ではなく全てにおいて向上が確認された。実験用マウスにおいての強化人間化の結果より、寿命が倍以上延びることが判明。また、脳においても向上していた。さらに、強化人間の特徴といえる高次元空間想像能力があると分かつた。

始め「強化人間」について研究者たちは、軍用に作られた人間だと考えていた。しかし寿命の長さや身体的、精神的成長の遅さから判断し「強化人間」は新人類作製と考えなおされた。

そんな「強化人間」に首相たちはすべて無かつたことにし、自由を与える。他の技術は環境問題によって衰退していた社会を復興させるもの意外は破棄。そして5世紀に渡つて調査されたその島は、再び長い眠りにつくことになった。

「強化人間」それは、時が過ぎるごとに忘れ去られ伝説のものとなりやがて「未来人」と呼ばれるよつになつた……。

第1章・夜明け

共和国領バルンジ銀河団所属オルク銀河百十六区第七惑星クーロイス。

4度目となる共和国と帝国の戦争中、帝国軍の無差別爆撃によつて壊滅。終戦後、再建のため支援金が共和国から提供される。

しかし、その額は十分な量でなくやがてクーロイスはオルク銀河一の貧困国となる。

日が暮れクーロイスを深い闇が包み込む。そして、クーロイスは満天の星空の光りと首都セレンピアスの微かな光りのみとなる。

街灯が一つもなく、あたり一面廃墟と化した大通りを会社帰りの女性が一人歩いている。その女性が歩く道の両脇には、薄汚れた服を着た者が数人、彼女に物乞いをしている。

他にも、じつと見つめてくる者がぽつぽつと崩れかけた超高層ビルから現れる。いつものように彼女は、うつむいて軽くそれを受け流しそそくあと歩く。

セレンピアスまで後1キロぐらいの所で彼女は珍しい光景を目にしたため、その方へ歩み寄つた。

「僕、どうしたの？」

彼女は座り込んでじつとしている小学生くらいの男の子に、優しく声をかける。たいてい戦災孤児は同グループの中に入り、今ごろなら夕食をとつているはずなのだが、その男の子の周りには入っ子一人いない。

彼女はそんな男の子の前に、しゃがみ込み再び声をかける。

「お友達はどうしているの？」

その男の子は下を向いたまま少し首を左右に振った。

「私はエリシア、イクル・エリシア。君の名前はなんて言うの？」

エリシアに続き男の子が応える。

「ストラウド・ゼロ」

「ゼロ君は一人なの？」

ゼロはまゆつべつとつなんすべ。

「夕食は食べた。家は？」？

エリシアはまた質問した。

「食べてない。帰る場所……」

そう言つてゼロは口を閉じ黙り込む。

ヒリシアはどうしようと少し考へると、優しい声で私のうちに来ると言つた。ゼロは少しの間考え込む素振りを見せた。そして顔を上げ、うんと返事をする。

「シルバーランドの魔女」

時計が真っ暗な部屋に朝の訪れを告げる。数分後その音は勝手に止まり、再び闇の世界に静寂が訪れる。綺麗な茶髪の男がベットから体を起こし、眠気覚ましに頭を強く振った。

ウォールリンク（壁に窓のように取り付けられたスクリーン）が外の様子を映し出す。それによつて、部屋が明るくなるとベットの近くの机に置かれた携帯端末が機械音で喋り出した。

「おはようございます。メールが一件届いています。再生しますか」

男は端末にぶつかりまつに再生してくれと答えた。

「再生します。アレンだゼロ、今日は訳有つて一緒に行けなくなつた。時間になつたら一人で行つてくれ。……以上です」

再生された耳障りな男の声にゼロと呼ばれた男は、一緒に行つていふつもりは無いのだがと思いながら、携帯端末を腕に取り付け寝室を出る。

リビングに入ると部屋にある照明、テレビ、エアコンが自動的に電源を入れ動き出した。ゼロはキッチンに行くと冷蔵庫からおもむろに冷凍食品を取り出し、調理機に入れる。

テレビを見ながら朝食をすませ、身だしなみを整える。そして軍服に着替えると、すぐさま家を出た。

ゼロはエレベーターミナルまでの長い廊下をウォールリンクが映し出した首都コーバを見ながら歩いていった。

エレベーターミナルに着くと駅がある上の階へ行くエレベータに乗る。

百人ぐらいが裕に乗れるそれは安全を確認した後、扉を閉め動き出した。

駅のある階に着くと、大勢の人が一斉にエレベータから降りる。その人の波に飲み込まれるようになぜかゼロも降りた。

ゼロはそのまま、改札口へ向かい腕の携帯端末を改札機にかざす。ピッという音と共にバーが開き、ゼロは通り抜けた。

しばらくの間ホームで列車を待つているとアナウンスが入る。

「まもなく3番乗り場にフインディー行き列車が参ります」

レールのない透明な円形の筒の中を列車が静かに走つて来た。列車がホームに入つて来るとシューと空気が入つてくる音がし始めた。列車が止まり、列車のドアとその付近の筒の一部が開く。ゼロは2両目に乗つた。車内には、軍服を着た者が数人見受けられる。

耳鳴りに近い高い金属音をながしながら列車は静かに動き出した。ゼロは5つ先で降り、軍の教育センターに向かつて歩きだした。

第1章・夜明け（後書き）

誤字等あつましたら、報告してくれるといつねじです。
ご意見・ご感想まつてます。

第1章・夜明け？

ユーバ・共和国軍教育センター第一講義室。

講義室の一一番前にある大きなスクリーンの前にさまざまな勲章を付けた男が勇ましく立っている。

その男は、席に座っているゼロたちに向かって話し始めた。

「長期にわたったテスト、合格おめでとう。私はここ、軍教育センターの総合責任者ナビク・リギュラインだ」

耳障りな嗄れ声でナビクは、話しを続ける。

「晴れて君たちは、本田より共和国軍の戦闘機パイロットになる権利を得た。

これから約五年間優れた戦闘機乗りとして活躍できるようにならなければいけない」と努力するようだ。

では、これで私からの話は終わりだ。最近忙しくてな、まだ、話したいことが山ほどあるがまた今度にしよう。では、グヴェー教官、後は頼みましたよ

ナビクが話しを終えると座っていたパイロット候補生たちは瞬時

に立ち上がる。候補生からの敬礼を受け満足したナビクは、やたらとでかい勲章をジャラジャラと高らかに鳴らしながら講義室を退出した。

それと同時に候補生たちの緊張が和らぐ、しかしすぐ候補生たちに次の波が押し寄せた。ナビクにグヴェー教官と呼ばれたスキンヘッドで厳つい顔をした男が面倒臭相に候補生に話し始めたのだ。

「チツ。……早速だが明日のことについての話だ。明日から一週間、アシスタントとなる人材を自分たちで決め、2人1組のペアを作れ。

アシスタントとは、貴様らのアシスト、つまり戦闘中での機体の調整や、バックアップ、情報処理を担う役だ。男と女のペアが一般的だが別に男同士、女同士でもかまわない。

一つ言つておくが、気の合わないような奴とは組んだりするなよ。おつと、単独、ペア無しに志願変更する奴は話しが終わつた後、この場に残るよ。私からは以上。何か質問は？」

グヴェーはそう言つて候補生たちに睨みを利かせる。

「よし、話は終わりだ、アシスタントが必要な奴はさつと下がれ。俺に用がある奴は前に来い」

鋭い口調で候補生たちを動かす。候補生は息をつく間もなくそそくさと動き始めた。

取りあえず講義室を出たゼロは、試験期間中に行きつけの店となつた教育センター唯一のカフェに足を向けた。

今では立派な習慣となつた、コーヒーを飲みながら何か考え方をするということ。今日はいつもより、大切な時間の一つとなつた。

ゼロは、長時間に渡る緊張を解し、明日からのアシスタント探しについて考えていた。

友人が多い者であれば比較的簡単に見つけることができるのもうが、ゼロには友人と呼べる者が一人としていない。

ふと、ゼロの頭にアレンが現れたが、あんな奴とはこっちから願い下げだとすぐに思い別の案を練る。しかし、すっかり冷めてしまつたコーヒーを目の前に腕を組み考えても一向に良いアイディアが生まれない。ゼロは、ため息を漏らすしかなかつた。

第1章・夜明け？

「あー、ゼロちゃんじやない。どうしたのそんなに頭を抱えて」

そう言つながら現れた女性はゼロに注文されてないショートケーキを差し出した。

「ケーキなど頼んだ覚えはないのですが、それにすりゃん付けは止めてください。ミングちゃん」

ゼロはケーキを押し返す。

「もちろんサービスよ。サービス。まあ、合格祝いだと思つて食べなさい。それでさあ、何を悩んでるのよ」

「べつに大したことではありません」

ミングは手を叩き、あつ分かつたと声を上げる。

「さては、ゼロちゃん恋煩い？ 大人になつたわねえ。姉さん、うれしいわ」

「弟になつたつむりはありませんし、第一知り合つたのも数日前で

す

「 もへ、そんなことはどうでもここ。悩み事は何に？」

「アシスタンントをどうやって見つけようかと」

ゼロの心えに悩み始めたミングだつたが、急に何かひらめいたかのように顔を上げた。

「 あつと、いけない、お客様の御出ましだわ。とこいとでゼロちやんじめんね~」

ミングはスタスターと密の下へと駆けて行つてしまつた。おいおいと思ひながらゼロは、合格祝いのケーキを口へ運ぶ。

ふと、カウンター席に座つた一人組の若い女性に目を遣る。そのうちの一人と目が合つた。気まずく感じたゼロは何となく軽く頭を下げた。するとその女性も軽く頭を下げてきた。

何になさりますか、という呼び掛けに女性は慌てて顔を声の方向へとやる。ゼロも視線をコーヒーに戻した。どこかで合つた気がするのだが、と思いながらもケーキをせつせと口にする。そして、食べ終えるとコーヒーを一気に飲み、テーブルにある受信機に携帯端末を近付け、ピッという音と共に会計をすませた。

その勢いのまま、ゼロは店を出た。店の出口で何も考えずに突つ立つていたゼロだったが、アレンからお使いを頼まれていたことを

思い出し、ショッピングセンターへ足を進めた。

カフェで女性と田が合ってからのモヤモヤとした気持ちは買い物がすんでも消えることなく、ゼロの頭の中を漂っている。ゼロはその気持ちに構うことなく、駅に向かい帰りの列車を待っていた。いつもならば混雑する時間帯なのに、駅のホームには数え切れるほどの人數しかいない。珍しいなあ、と辺りを見回す。ふとゼロの目にカフェで会った女性の姿が目に飛び込んできた。

気がつけばとその女性に声を掛けていた。

「すみません」

その女性は振り向きセロに気がつく。

「カフェでお会いした方ですよね。どうかしましたか?」

女性が着ている軍服の肩にアシスタント候補生であることを示す白と黄色のラインが入っていることにゼロは気がつき、質問を投げかけた。

「アシスタント候補生だったのですね。パートナーは、もうお決まりですか?」

「いいえまだ、明日から探そうと思っていたので」

「もしよろしければ、私のパートナーになってくれませんか？」

「私は構いませんが、本当にいいのですか？ 今日初めてお会いしたのに」

少し戸惑いながらも、その女性はゼロのアシスタントになることを了承した。

「そう考えるのが普通ですよね。そういうえば、お互いの名前も知らない者同士でしたね。ストラウド・ゼロです。よろしく」

ゼロは右手を差し出した。女性は微笑み、ゼロと握手をする。

「バイロス・シェイルです。こちらこそよろしくお願いします」

あつ、とこつて腕に括り付けてある端末を操作し始める。

「連絡先を教えてもらえますか」

二人が連絡先を交換した後、列車の訪れを告げるアナウンスが入る。

「まもなく、三番ホームにルメギ行き列車がまいます。危険ですのでシールドパイプ及びホームドアには、手を触れないようお願いします」

乗車すると、空いている一人掛けの席に座った。

第1章・夜明け？

「あの。ストラウドさん

「ゼロでいいです。シェイルさん

「あっ、はい。ゼロさん、どうして私を選んだのですか」

「気が合ってそうな人だなあ、と思ったのと直感ですかね」

その答えにシェイルは、首をかしげる。納得できないうつなのでゼロは慌てて付け加えた。

「あと、以前どこかで会っていた気がしたので。……俺何言つてんだ

シェイルはたまらず笑う。

「何となく聞きたくなつただけなので気にしないでください

その後も二人は、自分の故郷について話したりして少しずつあつたがお互いのことを知つていった。

「じゃあ、ゼロさんは両親のことをあまり覚えていないんですね」

「ゼロは「つなづく」。ショイルは辺りを見回し今どこの駅なのか確認する。

「私は次の駅ですが、ゼロさんはどこまで乗るんですか？」

ゼロも今の駅を見て、あと三つ先です、と答える。ショイルは、シュンブル駅で列車を降りた。一人になつたゼロは一息つき、何も考えずにぼけつとしていた。するとそこに一番会いたくない者が現れた。

「やあ、ゼロー！」

その声にゼロはすぐさま頭を抱える。

「何でお前がここに居るんだ」

「なんだよ～。そんな言い方はないだろ。なあ、なあ、なあゼロー。今さつきまで一緒にいた美人はどういう関係なんだよ」

となりの席に座ったアレンがゼロを肘でつく。

「どういつ関係つて俺のパートナーたが」

アレンは大きく目を見開いた。

「今日、初めて会ったんだろ。あの人は、お前のことを知っていたのか？」

「いや、初対面だ」

「ならなんで了承してもらつたんだあ。あ、オレも、あんなにカワイイ娘がパートナーになるなら、単独機のパイロット候補生には志願なんてしなかつたのに！」

ゼロは急に声を上げる。

「そういうことか、だからお前は別の講義室だつたのか」

「ああ、そうとも。オレは一生一人で戦う。お前はいいよなあ。あの娘と、あんなことやこんなことができるなんて」

「なつ。お前何か勘違いしてないか？ 人生のパートナーじゃないぞ。アシスタントとしてだ」

アレンは目に涙を浮かべている。

「お前のよつなかつ」この男を逃がす女なんていね～よお」

「ほら、着いたぞアレン。しつかりしり、こつものお前はどうに行つた」

アレンは下を向いたままであつたが、ゼロと一緒に列車から降りた。列車がいなくなつても、アレンはホームから動じつとしなかつた。

「おい、アレン何か他に嫌なことでもあつたのか」

アレンはゆきくつと顔を上げた。

「ゼロ、もしかして心配してくれたのか。なあ、心配してくれたのか」

いつのまにかアレンは悪巧みがつまくいつたといわんばかりの顔をしている。

「ハツハツハツハツ」

アレンは腹を抱えて笑い始めた。

「オレがあんなことで悲しむと思つたのかゼーロー」

「お前ー。」

「やつやゼロ、お前はオレにまんまとだまされたのさ。こいつ女見つけたからつて調子に乗るなよ」

「あーばーよ、と手を上げアレンはわざわざと帰つていった。ゼロは一度とアレンを心配しないことを心に刻み込んだ。家に帰り着いたゼロはショイルからメールが来ていたのすぐに再生させた。

「えつとゼロさん。明日、もし時間があれば一緒にお買い物にでもいきませんか？　お互いをもつと知る機会にもなると思つので。連絡待つてます。……以上です」

特に予定もなかつたのでゼロはショイルにどこで待ち合わせするかを話した後、明日どんな話をしようかと考えながら夕食を口にしていた。ゼロは食べ終わつても考えがまとまらず、悩んでいた。手元の端末で時間を見るとすでに日付が変わつている。渋々ゼロは考えるの止め、一日の疲れを洗い流すと、すぐに眠りに着いた。

人々の行き交いが絶えないここは、コーバの数多くの都市でも一位の賑わいをもつ都市エンターラーのある場所である。その場所は、ビルとビルの間に作られた空中公園であり、人々にとつて恰好の待合い場所であった。

ゼロは、そこの中間に設けられた噴水に向かつて設置されているベンチでシェイルを待っていた。約束の時間よりもかなり早く着いたので、ゼロは田まぐるしく形を変える噴水をただ眺めていた。横から人か近づく気配がする。

「『』めんなさい。待たせてしまつて」

申し訳なさそうな顔でシェイルがやつてきた。ゼロはすくに立ち上がり、シェイルを迎える。

「いいえ。元々早く着くつもりで家を出たので、それにまだ約束の時間にもなつていませんし気にしないで。さあ、行きましょう」

シェイルは納得できなかつたが、ゼロが構わず歩き出したり、しかたなくついて行く。シェイルはゼロの傍らを歩きながら、ゼロの顔を伺う。どうやら機嫌は良さはそうだ。カッコイイ顔してくるなあとじつと見つめていることに気づきシェイルは頬を赤く染め慌てて

前を見る。

「シェイルさん」

急にゼロから声を掛けられたシェイルは声を裏返しながらも返事をした。

「どうひでどこに行きますか?」

「服を買いに行こうかと。場所は分かるので、私が案内します」

それから一人の会話は止まってしまった。シェイルは私から誘つたんだから私から話さないと、思い何を話そうか考える。しかし先に話したのはゼロだった。

「ショイルさんは、ここに来るの初めてですか?」

「いいえ。2度目ですよ」

「広いですねここ。クーロイスには連絡橋はありましたが、空中公園なんていう広さのものはありませんでした」

二人の横を子供たちが元気よく走り去つて行く。

「そうですね。私も初めて見たときはびっくりしました。大きな木があり、噴水があります。とても開放的で、いいなあと思いますけど。一度雲よりも高いところからビルを見下ろすのってどんなふうだろって興味本意でやつたことがあるんです」

「どうでしたか？」

「百聞は一見に如かずです。」

ショイルはゼロの手を引き、空中公園の端まで連れて行く。ゼロは、手すりを握り締め見下ろす。真下は、薄い雲で覆われているもの、その少し先にはシールドパイプや、車道を見ることができる。横を見ればゼロと同じように下を見ている人が少しばかりいた。

「どうでしたか？」

いつの間にかショイルが顔を上げこちらを見ていた。

「よくこんな所に公園作ったなあって。そろそろ、服を買いに行きますか」

「任せてください、とショイルは笑顔で応えた。

目的地に着くと早速ショイルは服を選び始めた。ゼロも服を選び

に行く。ゼロは上着を一着買つてまだ選んでこぬシユイルの元へ行く。

「いあんなこと。どれにしようか迷つていて」

シユイルは三、四着手にしている。これが似合いますよ、ヒゼロはその中から一着を指差した。

「そうですか。じゃこれにしようかな」

シユイルは、ゼロからすすめられた服を買つた。さりげなくゼロは、シユイルが持つた買い物袋を手にする。

「持りますよ」

「すみません。ありがとうございます」

「わろわろ、お腹い飯にしませんか?」

「そうですね。何か食べたいものとかありますか?」

「リリの郷土料理なんどうですか?」

シユイルはうなずき、コーバの郷土料理があるレストラン街へ向

かつた。レストラン街には、十店舗ほど各国の郷土料理店が並んでいた。ユーバの料理店の入るとウエイトレスが二人に声を掛ける。

「いらっしゃいませ。何名様ですか？」

「二名です」

「二名様ですね。では、」案内いたします」

二人は大きな窓側のテーブル席に案内された。

「いらっしゃい、おへつらわくください」

ウエイトレスは、その場から離れ持ち場に戻つていつた。

「どれにしますかゼロさん」

シェイルは、置いてあつたタッチパネルを手に取つた。ゼロは、迷わずオススメと書いてある料理に手を触れる。シェイルは別の料理を選んだ。三十分くらいたつと頼んだ料理が運ばれてきた。

「以上でよろしかつたですか」

「一人がつなづくとウエイトレスはこの場から去つた。

「このあと、どうしますか。ゼロをなんせどこに行きたい所はありますか？」

「特にないですが、どんな店があるのか歩き回りたいです」

「やうですね。私もあまりここに来たことがないので、やうしまじゅう

支払いは注文と同時に行われてるので食事を済ませると一人は話しながら店を見て回り始めた。

第2章・夢か真か？

「 もうこえぱ、ゼロわんせビー」の講義室で説明を受けましたか？」

「第一講義[室]ですか」

「そこ」にかなり強面の教官、こませんでしたか？」

「グヴェー教官の」とですか？ こましたけど」

「第一講義[室]を横切った時すごい大きな怒鳴り声が聞こえたんですけど」

ゼロは首を傾げる。

「私がいた時には怒鳴つてはいませんでしたが、有名な鬼教官らしいですよ」

「できるだけ関わりたくないです」

シユイルは不安そうな顔をしている

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

「 そつですか？」

急にゼロは足を止た。ちょっとこの店に寄つていいですか、ことわりを入れ、ゼロは機械の様々なパーツが売つてある店に入る。

パーツはきちんと整理されていて、シェイルには分からない部品がひしめき合つてゐる。店内はとても広く、パーツ別に細かく分別された棚によつてまるで迷路のようになつていて。シェイルは迷子にならないように、ズンズン進んでいくゼロにしつかりとついていく。

「ゼロさん。何を買つのですか？」

「ああ、愛犬のパーツを買おうかと」

「ペット飼つていらんですか？」

「犬つていつもロボットですけど。両親が生前、市販のペットロボットを改造して戦争で使つていたんです。戦争用といつても、ロボット兵器とまではいかなくて、サポート役のように使つていただいたみたんです。もちろん今は、武器一つも積んでいないんですけど」

「そうなんですか。そうだ、今度つれてきてくれますか？」

ゼロは笑顔で頷いた。棚から細い線を取り出す。そして腕の端末を見て買つべき物を再度確認すると、すぐ横の棚のケースから球体の物体を手に取つた。

「ふう。これでやるつた

ゼロが購入を済ませると、一人は店を出て再び探索を始めた。

「ショイルさんはなぜ軍に入らつと思つたのですか。」

ショイルは首を捻る。

「そうですね。いろいろ理由はあるんですけど、戦争で亡くなる命を一つでもなくやうと思いまして。ゼロさんは？」

「私は里親から勧められたので。里親も軍人でしたから。これくらいですかね。まあ、はつきりとした理由はないってことです」

日が傾き、大地をビルを空を赤く染める。

「そうだ。この階にとつても人気があるケーキ屋さんがあるんです。あの時もゼロさん、ケーキ食べてましたよね」

ゼロは慌ててショイルの誤解を解く。

「食べてましたけど、好きとこつわけではありません

シェイルは少し残念そうな顔をする。

「嫌いっていり」とはありませんよ。行きましょう」

人気というだけあって、ほぼ席は埋まっている。一人は少し待たされ後、カウンター席に案内された。シェイルは長く悩んだ上、チヨコレートケーキを選ぶ。ゼロは、すでに当店の一番人気と大々的にすすめてあるケーキを選んでいた。

そんなゼロを見て、シェイルは毎ご飯のときもオススメを選んでいたし流されやすい人なのか、はたまた面倒くさがりやのどちらかだろう、と感じた。

「おいしい。来て良かった。……ゼロさん。どうかしましたか？」

なかなか手を進めないゼロをシェイルは不思議に思つた。

「いいえ。少し考え方を。いただきます」

ゼロは、コーヒーに手を伸ばし、一口飲む。コーヒーはミングさんのほうが入れた方がおいしいなと思っていると、シェイルも同じようでコーヒーをすこち不満げそうに口にしている。

「シェイルさん」

「はい？」

「明日は空いていますか？」

「ええ。空いてますけど」

「自然保護区に行きませんか？」

シェイルは首を傾げる。

「構いませんが、どうしてですか？」

「シェイルさんも自然が豊かな場所に住んでいたと言つてましたよね。それに話したいことがあるので」

わかりましたとシェイルは頷く。

「今日は、車できてるので家まで送りますよ」

ゼロは立ち上がりシェイルの手を取る。

「あつ、ちゅうどゼロさん、」

ゼロは、シェイルの手を掴んだまま歩いている。しかしゼロは急に足を止めた。

「……シェイルさん」

ゼロは真剣な眼差しでシェイルを見ている。

「シェイルさん。車庫までの道がわかりません」

「……へッ？ あつああ。案内します」

まだシェイルの手は握られている。

「ゼロさん。手を……」

ゼロはすぐに手を放した。

「すみません。シェイルさん。とつ、とこかく行きましょつ」

シェイルはけつこう大きかつたな、と握っていた自分の手を見つめた。

車庫に着くとゼロは端末で車を呼び出す。機械の動く音がした後、車が大きなアームで持つてこられた。ゼロの車は後部座席があるのだが、とても大人二人が座れるほどのスペースはない。荷物をトランクという名の後部座席に積み一人は車に乗った。車の窓はウォールリンクではなく透明な素材で、できていた。ゼロは運転席に座るとハンドルを握り、アクセルを踏む。シェイルは、ゼロが運転しているので不思議に思った。

「ゼロさんは自分で運転するんですね」

「ええ。疲れているときはさすがに自動運転にまかせますけど。できるだけ自分で運転したいので。ベルタール第四地区であつてますよね」

「はい」

ゼロは普段自分で運転しているとあつて自動運転と変わらない乗り心地だ。

車はベルタール第四地区内に入り、ゼロはシェイルが指差すとおりに進む。

「ここで大丈夫です。ありがとうございます」

「仮にせよ、じゃあ明日の朝の8時に来るので

「8時ですね。わかりました。待つてます」

ショイルがエレベーターに乗ったのを確認すると車を直モードへと進めた。

ゼロは自宅に帰り着くと、犬型ロボットを手に取り話しかける。しかし、ロボットはうんともすんとも言わない。ゼロは、バックから買つてきたパーツを取り出し、ロボットの外装を外す。

「ユオン、少し触らせてもいい？」

銀色の服を脱いだユオンは、かなり「じりや」じりやした内部をさらけ出す。ゼロは絶縁体で作られた手袋をはめると、ユオンの本体から真っ黒に焼け焦げた球体を取り出し、新しい物に付け替える。しつかりと取り付けられていることを確認すると、導線を取り出し、古くなつた物と次々に取り替えてゆく。この間ゼロは夕食を一口も口にしていない。また、かなり時間もたつていてさつきからゼロに睡魔が襲い掛かっている。

やつとのことで全ての取り替えが终わつたのだが、ベットに行く気力もなく、ゼロは、そのまま寝てしまった。

真つ暗で、何の音も聞こえない世界に一人の幼い少年がぽつんと

座つて いる。

彼の周りにはおもちゃが散乱していく、彼のいる所だけ仄かな光が照らしていた。

彼はおもちゃで遊ぶこともなくただ下を向きじつとしている。時々彼は顔を上げ漆黒の世界を遠い目で見ては顔を下げていた。

突然、彼が見ていた方向に微かな光が現れた。彼は立ち上がりと一生懸命その光に向かつて走る。しかし、ちつとも光に近づくことはできない。それでも彼は走り続けた。呼吸が乱れ始めついに彼の足は止まってしまった。だが、まだ彼の目の先には光がある。必死になつて、届きそうもない光に手を伸ばす。

すると、急に光は目を開けていられないほど強く光り彼に近づいてきた。

光は手に触れるほど近づくと次第に暗くなり消えてしまった。彼は恐る恐る目を開く。そこには、彼の手をしっかりと握っている少女がいた。

彼女は微笑み、やせしく、そしてそつと彼に声を掛ける。

「一緒に遊ぼう」

「コオンは、目覚ましが鳴っているのに起きないゼロを大きく揺さぶっている。

「んっ…………」

ゼロは、はっと目を覚まし立ち上がる。

「コオン今何時だ！」

「コオンは呆れた様子でゼロの心に語りかける。

『大丈夫だ。いつも起きている時間だ。それよりもゼロ！ いつも私をこのままにしておくつもりだ。大体急に起きたら体に悪いといつも言っているだらう。試験は合格したのか？』

「合格した。そういう、今日はお前にも付いてきてもうう。紹介したい人がいる。」

『気づけば朝が苦手なはずのゼロがせつせと出掛ける準備をしている。リビングから出て見えなくなつたゼロにコオンは強めに語る。

『まあー。女か？ ザヒトモモレハ 一度拝見したい。……ああ』

自由に動かない体に苛立ちコオノサマの場で飛び跳ねる。

『わあーい。わあーい。ジャンプあるだけで体のあちいがきしむ
せてあひひひがきしむ』

シャワーを済ませ、身だしなみを整えたゼロがリビングに戻つて
きた。

『ナウハツナ。今でやる」とサマでやつてこむ

いちいち話方を変えるなどゼロは懲懃をつきながらコオノに外装
をつける。

『お前にも女ができたのか。ならばもう女のふりをしなくてよく
なるんだな』

「こつお前に女のふりをしてくれと頼んだ？ 性別をえないくせに、
まあここもつすぐ約束の時間だ。車に乗れ』

『まこね』

ゼロは車を走らせ、ショイルを迎えて行く。待ち合わせ場所にはすでにシェイルが待っていた。ユオンが後部座席から顔を出し、ショイルを観察する。

『ほおー。かなりの別嬪さんやないか!』

ユオンに黙つておけと告げゼロは車から降り、シェイルを迎えた。

「ヨーバ自然保護区。」

ベルタール第四地区から車で一時間ほど走り、やつと保護区の入口まで辿り着いた。

入口には武装した警備員が一人立っている。自然保護区は十五階建てのビルほどの高さを持つ、分厚い壁が周りを囲んでいる。また入口はここ一つしかなく、必ず警備員による検査を受けてからしか入ることができないようになっている。

ゼロは速度を落とし、入口に近づく。すると警備員が歩み寄ってきた。

「身分証明を呈示しなさい」

二人は携帯端末を警備員に見せる。警備員は、確認すると車の中を調べ始めた。

「ん？　このロボットは何だ？」

警備員はコオンを指差す。ただのペットです、とゼロはすぐに応えた。

「そりかならないんだ。トランクを開けなさい」

言われたとおりにトランクを開ける。警備員は、何も入っていないことを確かめると、どこかに連絡し始めた。

「男女一人、ロボット一体、チェック完了。門を開けてくれ」

ゆっくりと大きな扉が口を開け、ゼロたちを迎える。扉の向こうからは保護区だ。保護区内は車道が狭く、両脇には木が行儀よく並んでいる。少し進むと森が開け、車が2～3台入りそうな場所に着いた。

しかし、その先からは、道は舗装されておらず、車で行くことができない。どうやらここで車から降りるということのようだ。二人は、車から降り、その後をコオンが付いていく。

歩けば歩くほど森林は深くなり、周りには見たこともない大きな木が生い茂っている。また、コケが木の根元だけでなく、二人が歩いている道まで被い、その光景が一層異世界感を引き出していた。

ショイルはてつきり動物がたくさんいて、それを見ようとした多くの家族がやってきているものだと思っていた。しかし現実は、遠くの方から聞こえてくる微かな鳥の囀りと森と森と森。まず、入口

の前に武器を手にして立つ警備員がいたといひから思ひ違ひをして
いる感じていた。

次第に、そもそも何だらうとこいつ疑問が沸いてきた。たま
らず、ゼロに質問した。

「ゼロさん。ここはこんなにも何で厳重に守られているんですか」

「昔、この森のどこかにオーバーテクノロジーの一つがあった、と
いう噂を聞いたことがあります。本当のことは、分かりません。ま
あ、あれだけ厳重にしていれば普通の自然保護区とは違うといつこ
とは確かです」

ゼロは急に立ち止まり、コオンを呼び寄せた。

「コオンの岩、登れるか?」

コオンは何も言わず、足から鋭い爪を出し、ほぼ垂直の大きな岩
の壁を登りだした。

「コオン、とこつ前なんですね」

ショイルは絶壁をよじ登るコオンを見つめる。

「幼いころからの友人です」

「そりは見えませんけど」

首を傾げるゼロにショイルは話を続ける。

「だつて、古くからの友人ならあんな崖を登れなんて言いませんよ

ゼロが抗議しようと口を開けたとき、一人の心にコオンが語り掛けた。

『おお！ やつとこの私の惨めさを理解してくれる者が現れたのか。ショイルとかいう名だったなあ』

ショイルは、耳では聞こえない始めての心の声に困惑い、声の主である崖の上にいるコオンを見上げる。

『すまないね。心の声は初めてだつたか』

「はい。えつと、バイロス・ショイルと申します」

崖を登り終えたコオンは、体から金属製のロープを出す。

『さう硬くなるなるなショイル。もしやバイロス・グレイブの娘か？』

「はい……。あつ、うんううだよ」

『さうやつ、それでいい。やはりそうか。顔立ちは似ておらぬが、よく一コラとするところは父親譲りだな。さあ、立ち話しも終わりにじよ。ゼロ、準備はできてるだ』

ゼロはロープの先についたグリップを握る。

「ショイルさん。」これの使い方は知っていますか？

「はい。知っていますよ」

二人の会話を聞きあきれたコオンが声を上げる。

『そこのお一人さん。もつと仲良く会話はできんかね』

ゼロとショイルはお互いを見つめ合つ。そして照れ合つた。

『 もついい。 やつやと登つて来い』

ゼロはロープについていたグリップを強く握るとグリップがロープを伝つて上に上がる。ゼロが登り終えるとシェイルも続き、大きな岩を登つた。登つた岩はこの森林で一番高い所に位置し、森林全体を見渡すことができる。

「それで、ゼロさん」

『 いじまんー。』

「ゼロ。話しつてなに?」

ゴオンは一人頷いた。

「シェイル。俺が話したつかたことは夢についてだ。夜に見る夢だ。子供のころの夢の中に女の子出てきていたんだ。その子がシェイルさんに」

『 いじまんー。』

「 シェイルにじいに似ていて。まさかとは思つが違つよな

ゼロの言葉にシェイルは固まる。シェイルも幼いころに夢でゼロに似た男の子と遊んでいたからだ。

「えつ。もしかして、昨日もその夢見ましたか」

『ん?』

「見た?」

ゼロはああ、と強く頷く。

「じゃあ、あの男の子は幼いころのゼロ?」

シユイルはゼロの顔を見て夢で出来た男の子と比べてこのようだ。

「本当。そつくつー」

ゼロは恥ずかしそうに顔を伏せる。

『ゼロ、またね』

「ああ」

ショイルは、エレベーターの前でゼロに向かって手を振っている。振り返れないゼロをユオンがど突く。

ショイルがエレベーターに乗るとユオンとゼロは駐車場に歩き出す。

「はあ～」

やけに長い一日が終わり、車に乗り込んだゼロは溜め息をついた。

『何がはあ～だ。少しは感謝しろー。』

「ああ。そうだな」

『ほれ。さつあと車を動かせ。帰るぞー。』

ゼロはまた溜め息をつき、車を走らせて家に向かった。

長かった休日も終わり、今日から本格的な講義が始まる。

ゼロはコオンを家に残し、いつもと変わらない時間に家を出た。列車に乗るとゼロはシェイルにメールを送る。そして、ションブクル駅でシェイルがゼロと同じ車両に乗り込んだ。シェイルはゼロを見つけて、隣の席に座る。

「ゼロ、おはよう」

「おはよう」

二人は田舎を合せ挨拶をした。

「いよいよだね」

「ああ、やつだな」

やつだとゼロは外を見つめた。

「何を見ているの？」

ゼロは視点をシェイルに戻す。

「ん？ 外を眺めているだけだ」

シェイルの手を握り、再び外を眺め始めた。風景が次第に変わり軍用施設がちらほらと現れる。列車は軍教育センターの最寄り駅に着き、二人は降ると歩きだした。

センター内に入るとそれぞれの集合場所に分かれた。ゼロはこの前と同じ場所である第一講義室に向かった。席は決まっていないようなので適当に座る。少し待った後、時間通りにグヴェー教官が入ってきた。同時にゼロは立ち上がり、ほかの候補生も息をぴったりと合わせ立ち上がる。敬礼をして、グヴェーの指示で候補生たちは席に着く。

「よし。よく聞け、今日からお前たちはパートナーを決め早速、講義を受けてもらづ。そこで、今からパートナーと行動してもらづ。パートナーが決まっていない者はいるか？ いるならば挙手しろ」

すると、数十人が手を上げた。

「まあ、こんなものだらう。決まっている者はA-63室に移動しろ。決まっていない者はC-5室に移動だ。以上。さつさと動けよ」

了解と候補生たちは返事し、出て行つた。

A-63室に入ると、すでに席に二人一組で座つている者とパートナーを待つているものが前の方で集まつていた。その中からゼロはシェイルを見つけて出し、声を掛ける。

「シェイル」

「あつ、ゼロ」

二人は端末を持った教官らしき女性に登録してもらつ。

「ストラウド・ゼロ。バイロス・シェイルだね。登録完了つと。そちら辺に座つてて」

二人は座つて話しながら待つていると、後ろから声を掛けられた。

「シェイル、久しぶり」

振り向くとそこには背の高い女性が座っていた。

「ゴミルー、

ゴミルはゼロをじっと見る。

「この人は？ シェイルのパートナー？」

シェイルは大きく頷いた。

「へえ、こんなかっこいい男で見つけたのう～

「えつと。合格発表の帰りに寄ったカフュでゴミルも会つてたんだよ」

「えつ、本当？ 気が付かなかった」

シェイルはゴミルの隣を見るが、そこには座っていない。

「ゴミルのパートナーは？」

「トイレに行つてゐる。来たら紹介するね。で、紹介してよシェイルのパートナー」

「うふ。彼はストラウド・ゼロ」

ゼロは、何も言わず軽く頭を下げた。ビシビシと足音が聞こえてきそうだ、大きくがつしりとした体付きの男がやって来た。

「何だ。まだ始まつていないのか。ゴミル、そのお二人さんは友人か?」

「シェイル、この人がディオネさん」

シェイルは首を傾げながらディオネを見上げる。

「あれ。ゴミルってタイプ変わった?」

「そつ、そつかな?」

「そうだよ。だつていつもスラリとした男が一番いいとか言つてたよ

シェイル以外の三人は瞬時に固まつた。ここで話す内容じゃないだろう、とゼロはシェイルを見た。ゴミルさえ無反応だったのでシェイルは、私へんなこと言つたといつのような田でゼロを見つめてきた。

「あつ、そろそろ始まるみたいですよ」

ゼロは何かゴミルとトイオネの意識を戻すことには成功した。

第3章・新たな一日の始まり？

ゼロが思つてはいたよりも早く席は埋まり、候補生たちは話しを止め、前に注目し始めた。

前にいる教官たちの中から一人の女性が一步前に出る。

「候補生のみな、おはよう。私は、今日から君たちを指導するルミニオンだ。それでは今日の抗議を始める。」

候補生たちは、端末を取り出し、講義内容を記録していく。

「スクリーンに注目しなさい」

机にあるスクリーンに飛行機らしき物体が写し出される。

「今日は、大まかなことしか話さないから、別に記録する必要はない。では、ます始めに戦闘機の役割について話すとしよう。戦争において、最も重要なものは戦闘艦だ。

戦闘艦には、大型のエネルギー砲や大出力のエネルギー・シールドが装備されている。だが、敵艦も同じくエネルギー・シールドを持ち、戦闘艦のエネルギー砲をもつてしても破壊することはできない。そこで、戦闘機の出番だ。戦闘機でエネルギー・シールドの力が及ばない距離まで近づきエネルギー・シールド発生装置を破壊しシールド

を無力化。そして味方の戦闘艦近くに敵戦闘機を迎撃。

これらが、戦闘機の仕事であり、任務もある。次に戦闘機について。戦闘機は三種類に分けることができる。一つ目は宇宙戦専用のもの、二つ目は水中戦専用、三つ目は宇宙、水中、空中での戦闘が可能なものだ。で、早速だが今ここでどの種類にするか決めてもらう。質問がある者は挙手せよ。」

ルミニオンは候補生たちを見つめ誰も質問がないことを確認する。

「よし。それでは休憩時間を考える。その時間内で決めておくよ。以上休憩に入れ」

教官たちが退室した後、ちらほらと部屋を出て行くものが現れ、シェイルとユミルも部屋を出ていき、ゼロとティオネは残ることにした。

二人は会話を交わさずにいたが、ティオネがゼロの隣に移動してきた。

「えー。ゼロだつたけ？」

ゼロは皿を含めずに話す。

「ああ、そうだが」

「なあ。ルミリオン教官つてスタイル良いよな。見たかあの胸？」

ゼロはまつまらない、と叫わんばかりにそっぽを向く。

「あれま。興味を持つ話題と思ったんだが。シェイルさんも胸、テカイし……」

ゼロは立ち上がりティオネを睨み付ける。

「何が言いたい」

「いや~。その~」

そりに鋭い目でティオネを威嚇する。

「お前さんと、話したかつただけで、別に悪い意味で言つたわけじゃない」

依然として睨み付けていたゼロだったが、何故俺は怒つているのかという疑問が生まれるとすぐに謝つた。

「すまない。怒鳴つて悪かつた」

ティオネは少し困惑して、ゼロの肩に手を乗せる。

「それだけショイルさんのことが好きだとこいつだ。よし、あらためて、」挨拶としよい。ラグル・ティオネだ。よひしべ」

ゼロはティオネに顔を向け手を差し出す。

「ストラウス・ゼロ。」

そしてティオネは、立ち上がったままのゼロと握手をした。握手みるとティオネの手はゼロよりも大きいくらいだった。

手を離すとティオネは何かを思ひ出かうとしているのかストラウスと繰り返してくる。

「うふ？　ストラウス、…………もしかして、最優秀候補生か？」

ティオネが驚いた顔をする中、ゼロは頷く。

「うふなどいひで余るとは。歴代一位の優秀だと聞いたぞ」

「ヤレリまでは知らないが」

ゼロは首を立てずじまつと座り、心を落ち着かせる。ディオ
ネは、ゼロの怒りを買わないような話しが考へるが、下手に話し掛
けるのはまずいと思ふ、結局黙ることにした。

第3章・新たな一日の始まり？

セツハーハル、元ハーハル、ショイルとコモルが戻ってきた。

ティオネは自分の席に戻り、コモルと話し始めた。ショイルもゼロと話そうとするが、ゼロは腹間にしわを寄せ何かに困っていたので、解決するまで待つことにした。

しかし、休憩時間が終わりに近づいてもゼロに何も変化はなかつた。ショイルは耐えかねて、ゼロに声を掛ける。

「ゼロ、何をそんなに悩んでいるの？ もうすぐ終わっちゃうよ、
休み時間」

「……。ん？ 何か言つたか」

ショイルは溜め息をつき、あきれながらも、再び同じ質問を掛け
る。

「もひ、何を悩んでいるのって言つたの」

「いや、大した事じゃない」

まあいいや、とショイルは開き直り、決めておくよつと言われ

たことについて話しを変えた。

「ゼロは決めた？ 機体の種類」

「ああ。三つ目の機体がいい。シェイルは？」

シェイルは肩の力を抜き、ゼロを見つめ自然とゼロの手を握る。ゼロも口元を緩めた。

「私もそれで良いよ」

ユミルが、一人の様子を見て思わず口を開いた。

「とても一週間で、出来た仲とは思えないわ。ラブラブねお二人さん。でもあんまりイチャイチャしていると悪い教官に手を付けられるぞ！」

そう言われてシェイルは、顔を赤く染め、ゼロから手をなじりおしそうに離す。

休憩時間が終わり、ルミリオンが指示を出し始めた。

「それでは、一つ目の宇宙用を希望する者はA・50、二つ目の水

中用を希望するものは〇・65、二つ田は、ここに残れ。以上、各自移動を始めよ

全体の三分の一程が退出していき、それに伴つて教官たちの中から退出する者もいた。移動が済むと、ルミリオンに変わつて男性の教官が教壇に立つた。

「皆さん、こんにちわ。私は、機体担当のライマットです。今日は、機体の基礎知識についてお話しします。もしかするとすでにご存知のことも出てくるかも知れませんが、復習だと思つてしまつかり聞いてくださいね」

ライマットは、教卓のスクリーンを操作し、戦闘機を写し出す。

「皆さん、机の画面を見てください。これが戦闘機、詳しく言いますと全空間対応型戦闘機です。第一種戦闘機とも呼ばれたりします。ちなみに第一種戦闘機は、無重力下専用戦闘機、第三種戦闘機は、水中及び液体下専用戦闘機と呼んでいます。

第一種戦闘機の特徴は、空中、宇宙、水中の三つの空間で戦闘可能ということです。もちろん難点もあります。

宇宙で戦闘を行う場合、翼を持っている分表面積が広く被弾しやすくなります。水中では、水中用のエンジンではないので、ステルス性能が極端に低いですし、翼が大きな抵抗となってしまいます。また、空中、宇宙、水中でおのの機体のバランスを変える必要があり、そのための余分なコンピュータが、必要になります。しかし、それらの難点を踏まえても全空間対応とはとても魅力的なのです

第3章・新たな一日の始まり？

ライマットは講義室を見回し、候補生の様子を伺つ。

「そうそう、この機体はおそらく監さんが始めに乗ることになる戦闘機で、正式名称はKW-AS804Cです。

戦闘機にはランクがあります。階級ごとに乗れる機体のランクが決まっていて、一番低いランクからC級、B級、A級、S級、SS級となっています。この機体は、C級ですが第五期、最終形で現役時代はA級でした。おっと、第五期というのは、第五次共帝戦争時のことを表し、最終形といつのはその中でも文字通り最後に設計されたことを表しています。

因みに、KW-AS804Cは、クロス・ウイング社製です。クロス・ウイング社は、低コスト、ハイパフォーマンスである機体を作り上げる企業です。生還率も高いですよ」

ライマットが続けて話そうとすると、ルミコオンがわざとらしく咳払いした。

「おっと。私としたことが、余談はこれくらいにしておまじょう」

ライマットが、スクリーンの機体の後ろの方に触ると映像が変わり筒状の物体が映る。

「これが、エンジンです。このエンジンの仕組みは、エンジンブレードと呼ばれる羽を数枚、放射線上に取り付けます。それを数個、軸に固定します。すると、タービンのような形になります。そして、その軸を高速回転させます。そうすることで、エネルギーを生み出します。」

エンジンブレードは、特殊鉱石グリネシンを用いて作られます。稼動中は大量の熱が生じます。グリネシンは熱には強いのですが、温度が高くなると、効率が悪くなってしまいます。そのため、大量の冷却水が必要です。また、グリネシンは強度が低く、長く使い続けると金属疲労を生じるため注意が必要です。エンジンはメーカーによって、エンジンブレードの形状や大きさ、総枚数が異なります。つまり、個々に適したエンジンが作れるということです。」

ライマットは、映像を戦闘機に一度戻し、今度は緩やかなカーブを描く先端部に触れる。すると、カプセルを少し傾けたような物体が現れた。

「これがコックピットとなります。通称アエネアスです。本名は精神同化コントロールシステムです。コックピットには、スクリーンも操縦桿もありません。全て、頭の中に直接映し出され、頭の中で操縦するのです。

このシステムの確立によって、より早く操縦することができますになりました。もちろん、すぐにこのシステムを使いこなすことはできません。完璧に操れるには、3、4年かかるでしょう。一様、アエネアスが壊れたときでも操縦できるように、操縦桿やスクリーンが設けられた機体もありますが、殆どがアエネアスのみです。まあ、今の人達は身近なものとして、すでに使っているのですぐに

慣れると思いますがね
「

特別講義？（設定資料）

リリでは、ライマット教官が設定資料について詳しく教えてくれるページです。今回は、戦闘機の企業についてです。

戦闘機部門

ビロード・エス・オリンポス社

初めてSUV級の機体を作り上げた企業。創設者の口癖である。「性能第一」の信念に則りコストには手をつけない。あまりにも高額なので、機体の愛称に宝石の名前がつけられる。

また最も多くの傑作と呼ばれた機体を作っていることでも有名。

一言コメント

え～、この企業の戦闘機は高すぎるるのでHースの中のHースしか乗ることができません。

真に残念ながら、私は一度も乗ったことがありません。死ぬ前に一度でも良いから乗つてみたいです。乗ります。乗させてください。

クロス・ウイニング社

低コスト・ハイパフォーマンスを掲げる企業。生還率も高いため搭乗者に信頼を受けている。

一言コメント

この企業には長い間お世話になりました。私も何度も助けられたことか……。いえ、決して操縦が下手ということではありませんよ。

プラネット・ヒンタープライス社

今では珍しくなった、エンジンのみを作る企業。主に、ビロード・エス・オリンポス社に提供している。グロスウェルー速いエンジン『KR7866SB』を製作。

一言コメント

「Jの企業こそ宇宙」といつていい程のエンジン企業です。そういう、宇宙の果てプロジェクトに採用されたエンジンもこのもので。えつ？宇宙の果てプロジェクトを知らないですって！！それは、いけませんね～。特別にお教えしましょう。宇宙の果てプロジェクトとは、宇宙が広がる速さよりも速いスピードをもつ乗り物を作り、宇宙に果てがあるのか調べるという壮大なプロジェクトです。第三次共帝戦争後すぐに始まり、この瞬間も宇宙のどこかで果てを目指しているはずです。実は、運用開始から一年足らずで行方知れず。。。でも私はまだ、この宇宙のどこかにいると信じています。えつ、一言コメントになつていなつて？ そんな今さら言つたつて遅いですよ。因みに私は、一度プラネット・エンタープライズ社のエンジンを使いたいと上面に言つてみたのですが、お前になど必要ないと却下されました。

テクニカル・ユニオン社

様々な分野の集合体企業。戦闘機に必要な分野は全てそろつ正在ので、他に類がない完成度を誇る

一言コメント

テクニカル・ユニオン社は、セントローレンス社、アルゴル社、リザリオ・エイター社、オリフェエル社が合わさった集合体企業です。

機体のみを作る企業の場合、戦闘機を完成させるためには、エン

ジンや兵器が必要です。そこで、エンジンを作る企業や兵器を作っている企業などからパーツを選択し、組み合わせます。このため、設計の時点での制限が生まれてしまいます。例えば、機体を専門に作る企業A社が新型機を設計しています。そこでA社はB社のエンジンCを採用することに決めました。しかし、新型機にはある特殊な装置を搭載予定しているので、エンジンCは大きすぎ搭載できません。だからといって、搭載可能なエンジンDにすれば、性能が落ちてしまいます、とのようなことが実際に起きているのです。オーダーメイドという選択肢もありますが、これではコストが上がってしまいます。

えっと、まあ実をひとつ最近は、ほとんどの企業が自社で全て開発し、製作しています。ですが、今までエンジンを作ったことのない企業が急に性能の良いエンジンを作ることなど不可能なのです。そこで名乗りを上げたのが集合体企業です。集合体企業は設計時に機体、エンジンなどの設計を同時に行うことで完成度の高い戦闘機を作ることができます。

マンティコア・グループ社

テクニカル・ユニオンと同じ集合体企業。機体性能は並みだが、頭脳部分の性能は高く、一人乗り用の戦闘機に適している。

一言コメント

この企業は一人乗りの戦闘機を中心を作っています。一人乗りの

戦闘機は、アシスタントがないのでそれに相当する仕事をこなす人工知能が必要です。マンティコア・グループは最も優れた人工知能の技術を持っていると言われています。

ブリザルンバ社

新しい企業。他社のパートに合いやすい機体を作り、完成度は個体企業にしては高い。

一言コメント

この企業は、集合体企業ではありませんが、とても完成度が高いことで有名です。その理由は技術者がそれぞれの分野のエキスパートであるからです。少しコストは高めですが、SS級の戦闘機を製作しています。

第3章・新たな一日の始まり？

再び先程と同じことをして、機体の中央部に触れた。映像が変わり、部屋のようなものに変わる。

「最後に居住区まあ、居住スペースとも呼ばますが、これについてです。戦闘は一日、二日で一度帰還する時もあれば、1か月、一年も長期に亘って一度も帰還せずに戦い続けたり、単独で長距離を移動することがあります。

そのような場合には、食事をしたり、睡眠が必要になります。そこで、戦闘機には居住区が設けられています。居住区には、キッチンやベット、シャワールームなど日常生活において必要なもの全てが備わっています。お世辞にも広いとはいえないスペースですが、不自由は何一つありません」

ルミリオンが、はあ？と思わず声を上げた。そして、そのまま胡散臭そうにライマットを見る。

ディオネがその光景に堪らず声を潜めた笑った。コミルが慌てて嗜める。

「おやおや、もう」んな時間ですか。一度休憩を入れます。どうぞ自由にしてください。次もこの場所で時間は予定通りです

解散の指示を出した後もルミリオンとライマットは退室せずに睨み合っている。一方、候補生たちは上官が出て行くまで座つていな

ければならないので誰一人として動こうとしている者はいない。異様な静けさの中、ルミニオンは鼻で笑うと講義室を後にした。

しばらくして、ライマットも退室し、やっと平穏な空気が戻ってきた。講義室を出る者がぽつぽつ現れたのでゼロヒショイルも出ることにした。

特に部屋から出た理由は無かつたので一人は、廊下の窓から外の様子を窺う。ウォールリンクからは、軍専用の滑走路を戦闘機が行き交いしているのが見え、中にはふらふらしながら、垂直離陸を試みる機体もある。

「やれやれ。あいつは、進歩が無いな

いつの間にか、二人の後ろで男性の上官が同じように訓練の様子を見つめていた。二人は慌てて急に現れた上官に敬礼をする。上官は敬礼を返すと講義室に入つていった。

「みな、揃つているようだな

先程、敬礼を交わした上官が今日最後の講義を始める。今にしては珍しく白髪頭で顔には深いシワがあつた。

「よし。まずは、自己紹介といこうか。私は携行装備について君たちに教える。フェーバだ。」

フェーバは教壇ゆっくりと歩きながら講義を進める。

「何か気になることがあればすぐに手を上げてくれ」

ディオネが早速手を上げようとするが、コミルの太股を抓る攻撃で上げる気が無くなつた。フェーバは足を止め、候補生たちを不思議そうな顔で見つめる。

「うん？ 毎年、私の容貌を見て質問をする者が一人か二人いるのだが……。まあ、少なからず疑問を抱いている者はいるだろう。私は好きで老化を進めたのではない。薬が利かない体になつてしまつてな。君達も聞いたことがあるだろう。延命治療の薬に対して抵抗する細胞が出てくる人間が増えてきていることを。見ての通り私はその一人だ」

フェーバは話し終えると再び歩きだした。

第3章・新たな一日の始まり？

「私の話は」れぐらいにして講義に移ろつか」

フローは、候補生たちに映像を送る。

「一見宇宙服にも見えるが、これが戦闘服。と、いうよりパワードスーツだな。パワードスーツとは、宇宙服の機能だけでなく、肉体強化や移動能力を向上させる。言わば、着る兵器だ。パワードスーツは人工筋肉よつて動くが、内蔵してあるスラスターで高速移動することも出来る。またステルスシステムが標準装備として搭載されている。

装甲は主に2つに分けられ、1つ目は大部分を占める厚い主装甲。2つ目は関節など動きが必要になる部分を守る副装甲だ。種類によつて防御力は変わつてくるが戦闘機のエネルギー機銃の直撃から1つ2発は耐えられる。負傷した際には戦闘を続けながら応急処置が可能で麻酔や止血はお手の物だ。動力源は背中にあるエネルギー発生装置でこれもまた、種類によつて変わつてくる。また、スラスターからもエネルギーを確保することも出来ぞ。パワードスーツは大きく分けて三種類ある。軽量、中量、重量この三つだ」

「画面に大きさや形が異なる武器と思われる物が映る。

「まずは軽量パワードスーツについて。軽量装備は運動量の多い者

向けに副装甲部分を広げ、スラスターを小型にし、数を多くすることでより敏捷な行動が行える。エネルギー発生装置も小型化されているため、高出力の武器は使えない。

ああ、こじで武器について補足しておこう。武器は銃や剣が主なものとなっている。今の武器のほとんどがエネルギーによるものだ。エネルギーの供給方法は、ダイレクト式とシリンドラー式の二つだ。ダイレクト式はその名の通り、エネルギーパイプなどを通してエネルギーを直接補給する。この利点はリロードの必要がなく、供給装置が小さくて済むことだ。欠点は、パイプで供給しているため、傷つくとエネルギー漏れが起き、爆発する恐れがある。一方、シリンドラー式は予めシリンドラー内にエネルギーを充填しておき、それを武器に装填する。利点は、充填する際にエネルギー圧縮が出来ることだ。シリンドラースロットが2個以上ある場合は一つ目のシリンドラーに一つ目のシリンドラーのエネルギーを入れることで装填していくも、圧縮出来る。このエネルギー圧縮は、ダイレクト式でも可能だが、事前に圧縮は出来ない。欠点はシリンドラーにエネルギーを充填する装置が必要となり、さらにシリンドラー 자체がスペースを取ってしまう。また装填する作業で時間を必要としてしまうことだな。軽量パワードスーツの基本武装はシリンドラー式ハンドガン、シリンドラー式ブレード、ダイレクト式ブレードだ。まあ、基本武器は必要最低限の装備だからな、本当はもっと多くの武器を扱う。では、ここまでで質問はないか

ディオネが手を挙げた。まさかこじで挙げるとは思っていなかつたのでユミルは止められなかつた。

「おおー、良いとも。君、名前はなんとこ？」

「はつ。ラグル・ディオネと申します」

「ちょっとディオネ、とコミルが立ち上がりつたディオネを引っ張る。フ・バは一人で頷き、とても嬉しそうな顔をしている。

「それで、質問は何だ？」

「はつ。基本武装にブレードが含まれてゐるようですが、白兵戦など起じにつるのでしょうか？」

「うん、実にいい質問だ。銃という武器があるならそれでやれるだろ」と思つてゐるのだな。確かに第一次共帝戦争までは、剣などの至近距離のみ有効な武器は無かつたといつより考えられなかつた。しかし第一次共帝戦後、両国家で攻撃を弱める対エネルギー装甲が開発されると話しさへ変わつた。そして、対エネルギー装甲の性質の一つに連續でエネルギーを受けると、弱める能力がほぼ無い状態が起ることが判明すると、エネルギーを連續で照射するエネルギー・ブレードが生み出された。至近距離において小型な武器でも破壊力をもつ武器として使用されるようになつたわけだ。これでいいかね？」

ディオネは頷き、座つていいぞと言わると静かに席に着いた。

第3章・新たな一日の始まり？

「では次に、中量パワードスーツだ。中量はパワードスーツ自体に大きな特徴はないが、幅広い種類の武器が使える。基本武装はシリンドラー式ハンドガン、シリンドラー式ブレード、リニアアレール式大型銃などだ。

最後は、重量パワードスーツ。重量と名づけられているが最高速度は一番速い。主装甲を強化した分だけ、スラスターを強力にしている。エネルギー出力も大きいがとても扱いにくいパワードスーツだ。基本武装はシリンドラー式ハンドガン、シリンドラー式高出力ブレード、シリンドラー式重量銃剣となっている。それでは次は……」

今日、全ての講義が終わりゼロとシェイルは一緒に夕食をレストランで取ることにした。そこは若者に人気のレストランであったが、シェイルが予約をしていたので待たされることなかった。テーブルに並べられた彩り豊かな料理にゼロは早速、口にした。

「ねえ、ゼロ」

「何だ？」

「ゼロって人と話すのが苦手?」

思つてもみなかつた質問で、ゼロはステーキを口に運ぶのを止め。テーブルの下で聞き耳を立てていたコオンは、ゼロがどう答えるのかワクワクしていた。因みにコオンはかつてに家から出てきて、いつの間にかついて来ていた。

「上手ではない」

「昔からやうだつたの?」

食べ物を口にすることが出来ないコオンが、口元をぱかりに口を開く。

『ああ、その通り。ゼロは友達も少なくて私がいつも話し相手になつていた。子供のころは今よりもっとひびかつたぞ。それとゼロ、お前は誰が見ても下手だ』

「ゼロ、一切あげようか?」

「いいのか」

ありがとう、とゼロはショイルからステーキをもらひ。ビシヤウ一人の心にコオンの声は響かなかつたよつだ。

『おい！ 私の話しが聞け』

二人は笑顔で見つめ合っている。

『無視か？ 無視なのか、二人して。どうせ私は、召使いロボットだ』

やつと心にどいたのか、ゼロが反応した。

「ユオンそれは間違っている」

『ゼロ…』

「お前は軍用犬だ」

ゼロの言葉が何度もユオンの頭の中で繰り返される。ユオンは頑垂れ、返す言葉も浮かばない。

「かわいそう」

その言葉にコオンはショイルのもとへ寄る。

「犬なのに吠えないなんて。だから、ゼロが話し相手になつてた
んだね」

急に震えだしたコオンをショイルがやさしく撫でた。

教育センターに入つてから数ヶ月がたち、初めてとなるテストまで数週間となつた。共和国軍では、実技演習に入る前にテストが行われる。このテストに合格すれば、戦闘機に乗ることが認められる。そしてその後、一度の実技テストの後やつと最終テストを受けることになる。ただし、テストは一回しか受けられず、一回失敗すると特別な場合を除いて一生軍人になることは無い。そのため、この時期になると完全消灯ギリギリまで候補生たちは教育センターに残る。

ゼロとシェイルも一人そろつてテストに向け勉強している。二人がいる場所は自習室ではなく、いつものカフェである。人気があるので、自習室なみの静かさを持っている。

「ゼロ、この問題手伝ってくれる

ゼロ、シェイルの端末に目を向けた。

以下の場合において最善策を考えなさい。目標解答時間5分。空間条件なし、右エンジンに被弾。被害A - 3大破、メインパイプ大破、冷却水30%減少、出力50%低下。左エンジンは過冷却20%で通常運転。機体は、K W - A S 8 0 4 C 演習機である。

「そうだな、俺なら緊急冷却でまずは右を抑える。落ち着いたら、6対4にするが」

そういうゼロは、ショミレーションを言葉通りに実行した。すぐ結果が告げられる。

「予想される結果は、冷却水45%減少、右出力40%、左出力5%低下」

シールは満足とは言えない結果に首を捻る。

「やっぱり、緊急冷却は無駄遣いになるしどうしたらいいのかな」

「思い切って、左からもう一つだ」

「うふふ。……そうだ。左をメインからサブに切り替えて」

どうやら解けたようなのでセロは自分の端末に視線を戻した。

一人が熱中して取り組んでいる中、ミングが一人の肩を叩く。

「どう? 進んでる。あなたたちを見ていると、昔を思い出すわ。あの時は、話しかけられるだけで嫌気が差していたわ」

分かっているのなら、と二人は叫びたかったがいろいろと親切に

してもらっていたため、心の中で爆発させる。一人の心の叫びに驚き、コオンが飛び上がった。

「あら。あなた、コオンなの？」

ミングの目の前には、誰から見てもただの犬が寝そべっている。

「その服、似合っているわ

シロイルからのすすめもあって、ゼロはコオンに本物の犬のように毛を生やせ、吠えるようにしていた。コオンはあまり気に入っていないようだが、以前にも増して犬らしくなってからはよく、赤の他人からも声を掛けられるようになった。

コオンがわざとらしく様々な犬種の声で吠え始めた。ゼロは不由しないようにと、世界中の犬の声を入れたのだ。コオンはミングに悲しい顔を向け同情を求める。

「コオン凄いわね。本物の犬みたい」

またもや期待していた言葉が得られず、コオンは塞ぎ込んだ。

「こんな話、しに来たんじゃなくて、お一人さん。最近、遊びに行つたりした？」

そんな暇はありません、ヒュエイル。こんな時期に本気ですか、とゼロ。ミングは、2枚のあるチケットを手渡す。チケットには、映画の上映時間や座席表、予告映像が入れ替わりながら常に流れている。

「いいのですか。手に入り難いものなのに」

「夫の帰りが遅れるみたいでね。代わりに行つておいで」

一人は遠慮したが、ミングの押しに負け、受け取らせてしまった。その後も話は止まらず、ようやく途切れたらところでヒュエイルが、少し用事があると言つて出て行つた。ミングはヒュエイルの姿が見えなくなつたのを確かめると急にゼロの耳元へ寄つた。

「ヒュエイルとは、ヒュエイルまでいったの？」

「どうまでで、何も進んでいません」

ミングが大声を上げ、立ち上がる。酷い耳鳴りが、ゼロを襲つた。

「信じられない。どうこうつもつ。早く物にしなさい」

噴火寸前の火山のよつたな剣幕でミングは迫つて来る。

「ですがシェイルと会つてから、まだ数ヶ月しか」

「もうよ、もう！ 知らない人に盗られちやつわよ」

ゼロが考えておきます、といつと火が付いたのかますます話しに熱が入つた。数十分後、お客さんが入つて來たことでやつとゼロは開放された。

その後ゼロは再度、問題に取り掛かるが眠気き襲われ頭が回らない。仕方なく、端末の電源を切り視界が狭まる中、コオンの頭を撫でた。

「……ゼロ。ゼロ」とシェイルの声が優しく響いてきた。どうやら知らぬ間に寝てしまつていたようだ。目を開けると、外はだいぶ暗くなつていてカウンターでは、ミングがせつせと店仕舞いをしている。

「ゼロ。この後空いてる？ ご飯作るから私の家に寄つていかない」

「いいのか、ご馳走させてもらひつ」

センターから出た頃には、すっかり目が覚め、通りにあるスピーカーから夜を告げる音楽が耳を打つ。

「まもなく、完全消灯時間です。まだ、外にいる方は速やかに帰宅し、完全消灯時間後は外出をお控えください。皆様のご協力お願いいたします」とアナウンスも流れ始める。

二人と一匹は、やけに人気のない列車に乗り、静けさに包み込まれる街を眺める。

シェイルの自宅に着くと、すぐにシェイルは夕食を作り始めた。夕食を食べ終わる頃には、完全消灯時間となり、街から光が消える。

片付けを済ますと一人は端末に手を伸ばした。シェイルがウォールリンクを真っ暗な街の映像から南国の海に変え、部屋全体が青色に色づく。コオンは一人を余所にソファーの上で丸くなつて寝ている。テレビの電源は切られており、ウォールリンクからは音が出ないので、部屋は勉強には最適な環境であった。

問題を切りのいいところまで解いたゼロは、視線を端末から外す。映像の魚が動くたびに、壁を照らす青い色が踊る。欠伸をして、ふと前を見るとシェイルがすでに脱落していた。シェイルはぐつすり寝ていて声を掛けてみたが目は開けられることはない。そんなシェ

イルをそっと抱き上げ、寝室に向かった。

ベッドにゆっくりと下ろし、シェイルの顔を隠す髪をはらう。普段恥ずかしくて見つめられない分、穴が開くほどまじまじとシェイルを見る。

エメラルド色の美しい瞳は閉じられているが、異性にまつたく興味を持たなかつたゼロをも惹きつける整つた顔が目を離させない。自然とゼロはシェイルの頬を撫でていた。

いつまでも触り続けたくなる絹のような触り心地で、薄く開かれた口がゼロをいとも簡単に誘う。理性をなんとか保ちながらしつかりと目に焼き付けた。限界が訪れる前に、寝室を抜け出す。リビングに戻つたゼロはソファーアをベッド代わりに浅い眠りについた。

試験当日、教育センターはいつもと変わらぬ朝を向かえた。ゼロとシェイルは教育センターのカフェで話をしている。二人は昨日、ミングから譲り受けた映画のチケットを無駄にせず、息抜きとして見に行っていた。

「あと2時間だよ。どうしよう、不安になってきた」

「大丈夫だ。自分を信じろ」

シェイルは頷くが、不安な様子は変わらない。時間が近づき、二人は試験室に向かった。

予め指定された席に座り、教官が現れるのを今か今かと待つ。候補生がそろつたところで、三人の教官が入ってきた。ゼロは、後ろの方の席だったのではつきりとは分からないが、おそらくグヴェー教官とライマット教官、ルミリオン教官であろう。その内の一人が話し出す。グヴェーの声だ。

「今から、第一試験を始める。各試験時間は2時間。休憩時間は5分。昼食は一科目の試験後の30分で済ませる。以上。質問がある者はいないか？ それでは、くれぐれも不正が無いようにな」

机の画面に試験問題が映る。始めの合図と共に候補生たちは一斉に手を動かした。

候補生は仕切りで覆われ、内側からは外が見えないようになつている。試験室全体がピリピリとした空気で包み込まれていた。

試験終了5分になると、残り時間が解答欄の横に出され、終了と同時に画面が真っ暗になつた。

息つく暇も無く、次の試験が始まる。計算問題が最も多いこの試験は、最大の山場であり、合否を左右する大事な試験だ。候補生は最後の最後まで取り組み、心身を削る。

急な坂道を登りきつた後は、緩やかな下り坂が待つていて。緩やかといつても、その分長い。ここからは、集中力との戦いなのである。最後までそれを保つた者だけが生き残れるのだ。

全ての試験が終わる頃には、太陽の面影は無く日付も変わりつつあつた。完全消灯時間をとつぐに過ぎていて、この日はセンターで夜を明かすことになる。

途轍もなく長い一日が終わり、ペア毎に振り分けられた部屋でゼロとシェイルは食事をとつていた。センター内のホテルは思つてたよりも広く豪華だ。部屋は5つもあり、設備は全て最新のもの。全面ウォールリンクに体感型テレビ、世界中の料理を網羅する全自动調理器までよりどりみどりである。

一人の間に会話は無く、お腹を満たすとすぐにベットに身を委ねると、泥のように眠つた。

ゴーバ特有の強い朝日がビルを輝かす。ウォールリンクが起動しづロの顔を照らした。端末が朝の訪れを知らせるが、ゼロは微動だにしない。

それからしばらくして目が覚めたゼロは、動くのもままならなかつたのでベットからテーブルの上の端末に手を伸ばす。伸ばした手を振つたり、パタパタしてみても一向にとどかない。

天井で鳥たちが音も無く飛び去つた。仕方なく、重い腰を上げベットから抜け出した。ゼロは手櫛で髪を直しながら端末の電源を入れ、服を着替える。

「メールを再生してくれ」

早朝には似合わない無機質な音声で端末が応える。

「メールは一件です。軍教育センターからです。再生します。試験お疲れ様でした。試験結果は合格とさせていただきます。詳しい結果はセンター本部までお越しください。以上です」

「テレビをつけてくれ」

三次元の映像が小さなポットから現れた。ニュースキャスターの声は確かに耳に入ってきたが、頭にはぜんぜん入らない。部屋の管理システムがしゃべりだした。

「只今11時30分です。朝食はいかがなさいますか

「何でもいい。シェイルは起きているか

「ハイ。30分程前に

ゼロがリビングに入ると、ショイルが朝ご飯をテーブルに並べていた。

「あつゼロ、おはよう

ショイルが振り向き腰を下すと田代をこすりつけて、ゼロに声を掛ける。

「おはよう

ショイルが欠伸をする一つし、椅子に座った。ショイルを見つめていたゼロもつられて欠伸をする。

「試験どうだった？

「合格したよ。ショイルは？」

私も、と返ってきた。一人は喜ぶべきであったが、今はまだそんな気力さえ無い。昼前にはホテルを出て自宅に戻った。

玄関のドアを開けるとコオンが尻尾を振つて歓迎してくれた。

『随分、疲れているようだな。ゼロ、うつまくこつたのか?』

上着を脱ぎ、ソファーに腰掛ける。

「ああ。合格したよ

「それは良かった。頑張った甲斐があったな。だが、こんなところ
で寝るなよ

ゼロはゆっくりと立ち上がり、コオンは様子を見について行く。
相当疲れていたのだろう。ゼロは倒れこむよろべットに入った。
深々と寝入っているゼロの顔は、子供のようなあどけなさを残して
いる。

夕食前に目覚め、大分軽くなつた体を起こす。

『やっと起きたか

コオンがソファーに座りテレビを見ている。ゼロは向むかひず静
かに座つた。

『 いの程度でうつたえる様子じや、先が思いやられたるな』

コオングゼロのひざの上に片足を置く。

「 これで。 これでまた奴に一歩近づいた」

それを聞いたコオングが顔を下げる。

『 ふつむ。 あまり熱を入れるなよゼロ。 道を誤るだ』

ゼロは聞いているのかいないのか、 ただ前だけを見つめていた。

第5章：一人並んで

試験から一週間後、合格者が軍教育センターに集められた。

初め400人近くいた候補生たちが、今では100人足らず。短距離走が出来たくらい広かつた講義室も、一番後ろの席からグヴェーの鋭い眼光がはっきりと見えるほど狭さになった。

ゼロは、なかなか現れない教官に憤りをおぼえ、辺りを見回す。まず、一際目立つ大柄の男の姿が目に入った。ディオネであろうその男の横にはユミルが座っていた。一人とは離れていたところに座っていたので、声は掛けられそうにない。

隣にいるシェイルは、昨日買い換えた最新モデルの携帯端末に夢中だ。真新しい機能を見つける度に輝いた表情でゼロを呼ぶ。最近になつてゼロやシェイルが使つてている腕に巻くタイプの携帯端末は体内内蔵型に圧倒されているため、滅多に新型が出ない。

ゼロが買い換えようかと考えているところをやつと教官がやつて来た。かなり遅れているというのに何食わぬ顔で喋り出す。

「久しぶりだな。みな元気で何よりだ」

講義室の静けさが増した。どこかで聞き覚えのある声だったが、ゼロは誰なのか思い出せなかつた。しかし、服装からして位の高い者であることは分かる。

「君たちとは入隊テスト以来、私のことを忘れてしまったのではな
いか?」「

その教官はうんともすんとも言わない候補生たちを苦笑で迎える。

「仕方が無い。簡単な自己紹介でもしよう。私は、こここの総合責任
者ナビク・リギュラインだ。社長のような者だぞ。ハッハッハ、こ
れは来年のテストに出したら合格者が居なくなってしまいそうだな」

講義室がにこやかな笑いに包まれる。

「さて、今日は時間もあることだし、話しきをせんでもらおう

突然ドアが開いて慌しく教官が入つて来た。そして敬礼もなしに
口を開く。

「緊急招集がかかりました。同行願います」

リギュラインは頭に手を当てる。

「これでは、いつまでたっても彼らは点が取れないではないか」

「はい？」

候補生は黙つて事の成り行きを見届ける。

「仕方ない。話はまた今度にしよう」

一人が出て行つたドアから忙しく行き交う人を垣間見た。候補生がざわつき始めたところでルミニオンが現れる。

「全員いるな。今日から実技演習に入る。演習はグループ単位で行う。早速だが顔合わせといこう。グループはすでにこちらで決めている。不満は聞かないぞ」

端末には3・Aと表示されていた。

「グループの中でA B C D、と分かれているだろ。それは成績順にしたものだ。Aがグループリーダー、B、C、Dには役目は無い。リーダーを中心に仲良くな

ゼロは振り返り同じグループの顔を覚える。残念ながら、ディオネたちは別のグループのようだ。ふと、端末を見ると担当の教官

がグヴェーだった。

訓練が始まって早数ヶ月、候補生たちは初歩的な課題を難なくこなし、着実に力をつけてきた。

新たな訓練のために連れてこられたのは人、一人が優に収まる大きさの真っ白なカプセルが並べられた訓練施設であった。グヴェーが口を開く。

「今日から、アエネアスを用いた訓練を実施する。プログラムに従つてエンジンの方向転換からだ。さあ、入れ」

アエネアスがゆっくりと傾斜し、口を大きく開けた。ゼロはアエネアスに乗り込む。

「よし、訓練開始」

目を瞑り頭の中を真っ白にする。目を瞑つているのに、鮮明な風景が見えてきた。見慣れない滑走路に、一機の戦闘機が地に足をついている。

『どうだ？ 見えているか。見えている者は返事をしろ』

グヴローの声が頭に入ってきた。すかさず、ゼロは答える。

『A1了解』

ゼロに続いて他の候補生も返事をしていく。

『うん？ どうしたD2。……聞こえないのか。初めからやり直しだな。他の者は訓練を続ける』

候補生は訓練マニュアルに従つて戦闘機を操縦する。しっかりと思考できていれば、目の前にある戦闘機に動きがあるはずだ。ゼロの思考にぴったりとあわせて、エンジンが上下に可動し、ノズルが上下左右に動く。

『大まかな動きは出来るようだな。細かな動きもしっかりやれ』

ゼロはただ動かすのではなく、一つあるエンジンを同じ角度にしたり、非対称な動きをさせる。自由自在に操れるようになると次々に課題をこなしていく。

『さすが、最優秀候補生。こんな訓練お手の物か？』

グヴローのゼロに対する評価に他の候補生が負けじと力を入れて取り組む。

『よし、進めるぞ』

戦闘機が消え、代わりに高度計、方角計などが浮び上がった。

『今度はコックピット視点で訓練を行う。先程のように動きを確認できないからな』

ゼロの前に、青色のサークルが現れる。自分の思考にかかわらず、それは迫ってくる。おそらく、速さが固定されているのだろう。一つ目のサークルを潜り抜けると次々にサークルが表示され、青いトンネルを形成していく。

トンネルは蛇のように曲がりくねつていて激しい動きを求める。ゼロは一度もサークルに触れることなく前へ進んだ。進むにつれサークルは縮まり、スピードが上がる。初めは何ともなかつた候補生たちが、次第にグヴローの罵声を浴びていく。

今日の訓練の最後に操作が簡略化された垂直離着陸が行われたが、成功したものはゼロとシェイルを含む三人だけであった。

それから2ヶ月、飛行訓練の基礎を築くと変わつてパワードスースの訓練が始まった。訓練は本物のパワードスースで行われ、パワ

ードースーツを着込んだ候補生たちが、グヴェーを待ち整列している。少し遅れてやってきたグヴェーは、会議で遅れたというと候補生を訓練施設へ移動させた。

「まだ、電源は入れるなよ。そのまま移動しろ」

パワードスーツ自体は歩けなくなる程の重さではないので苦にはならない。しかし、隣で歩くシェイルはどこか辛そうだ。ゼロは教官の目を気にしながら、シェイルを呼んだ。

「シェイル、ビリした」

えつ、とシェイルはきょとんとした顔を上げる。

「……無理するなよ」

ゼロは返事を聞くことなく、シェイルから離れ少し先を歩く。シェイルは、深い溜め息をつきゼロの後を追つた。

戦闘艦がすっぽり入りそうな巨大な施設に着くと、グヴェーからフルフェイスマスクの装着とパワードスーツ起動の指示が出た。アーネアスと同様に外の様子が頭に入つてくる。

「電源を入れた者からチェックを開始。済んだら報告しろ」

パワードースツのシステムによるチェックが終わると、軽く体を動かし、きちんと同調しているか確かめる。電子機器が正常に作動しているか見て、グヴェーに報告した。全員のチェックが完了すると、グヴェーが訓練について話し出す。

「お前たちの目の先にある、障害物をペアで乗り越えることが今回の訓練だ」

ゼロの皿には、巨大な施設に見合った大きなぶつたが映る。

「よし。ゼロ、シェイル始めるぞ。スタートラインに立て。もし後からスタートした者に追い抜かれれば、……分かるだろ?」

グヴェーの合図で二人は全力で走り出した。ゼロが先行し、シェイルは足手まといにならないように、と付いて行く。

訓練開始から2時間以上たつたが、パワードースツのおかげで一切疲れは無い。この間、二人は一言も交わさず、顔さえ合わせていない。会話が禁止されているわけではなかつたが、シェイルから何かしら負のオーラが感じられ、話し掛けられなかつた。

そして、それはゼロがシェイルに手を差し伸べる度にそれをより強く感じる。訓練が終わっても挨拶を交わすだけでしかできなかつた。

ゼロは眠る前にもう一回シェイルのことを思った。シェイルの様子がおかしかったのは今日だけではない。もつと言えば、実技訓練が始まつてから気掛かりなことが多くなつていた。原因となるようなことがないか思い起こすが思い当たることはない。本人に直接聞くしかないと考え、明日に備えて眠りについた。

翌日ゼロは、訓練の合間に話を切り出そうとするが、気が付けばすでに夕方。多くの候補生が帰路に付く中、ゼロは元気のないシェイルに心を痛めた。

「シェイル。何があつたのか？」

シェイルが笑顔で答える。

「何が？」

「いや、最近辛そうな顔をよく見るから」

「……気のせいだよ

ゼロは歩みを止め、シェイルの腕を握った。

「シェイル！」

ゼロの強い呼びかけに心が揺れた。シェイルは溜め込めていた胸の内を話す。

「私は、……私は、ゼロと一緒に歩きたい。それなのに、後から付いて行くことしかできない」

心のどこかで感じていたシェイルの気持ちが、現実の言葉となつた。

「シェイルそうじやない。俺は、シェイルがいるからこそ前を歩ける。前に進めるんだ。里親にさえ心を開けなかつた俺は、シェイルに出会つて変わつた。目標もなしにただただ歩き回つていた俺に、一筋の道を作つてくれた」

シェイルはゼロの皿を食い入るように見つめる。

「皿には見えなくとも、シェイルは俺の手を引き導いてくれている。だからそんなふうに思つた。シェイルは俺といつも一緒に歩いている」

シェイルは顔を染めていった。

「ありがとう」

「いらっしゃ。もう大丈夫だな」

ショイルは大きく頷いた。

「でも、ゼロもクサイ台詞言つことあるんだね」

ゼロは恥ずかしいのか顔を伏せる。

訓練機の証である青と白で彩られた戦闘機。どこまでも澄んだ青い空が候補生たちの緊張を引き立たせる。

今日は、実技テストが行われる日。教官はグヴェーだけではなく、彼の横には名も知らない一人が立っていた。グヴェーは時間を確かめ、事を進める。

「時間だ。候補生は戦闘機に乗り込め」

熱い熱気が戦闘機に足を踏み入れる候補生を歓迎する。

『それでは、グループ3の第二試験を開始する。試験内容を再度確認する。試験はアルファベット順で行い、まずAスポットまで移動。停止した後、再起動を行え。起動後、垂直離陸。ポイント1に移動し、空中、海中、宇宙で飛行試験。終了したら再びAスポットに着陸、以上。よし、Aペア、試験開始』

ゼロとショイルが乗る戦闘機が編隊から離れ、滑走路に向かった。停止ラインまで移動した後、エンジンを切りシステムを終了させた。ゼロはゆっくりと深呼吸してから再起動に踏み切った。

『エンジンノーマルスタート』

エンジンブレードがゆっくり、大きな唸り声を上げ回り始める。大地が揺らめき、強い風が吹き抜けた。

『出力20%上昇、エネルギー供給開始』

計器類が目を覚ました。ここからは、ゼロは機体をシェイルは電子機器系統に分かれて入念にチェックする。

『エンジン、ノズル共に正常に可動。冷却システム異常なし』

『レーダー起動。高度、方位、速度表示確認』

ブレードの回転速度が上がり、エンジンの轟音が消えた。

『出力50%上昇。エンジン始動完了。オートチェックオールグリーン』

『セーフティーロック確認オートチェックオールグリーン』

再起動が完了し、ゼロは離陸にかかる。エンジンが直角に動き、ノズルが真下に向く。機首下のスラスターが装甲を開き顔を覗かせ

た。

巧みな出力調整の元、重厚な戦闘機が雲のように浮かび上がった。高度計の値が次々に変わる。そして高度計が赤色から、緑色になった。瞬時に降着装置が格納される。

『ギアアップ確認。シェイル』

『ええ。始めましょう』

スラスターを止め、エンジンを元の位置に戻す。ポイント1に移動して飛行試験を始めた。スクリーンには訓練の時と同じようにサークルが表示されている。

ノズルを目一杯絞り、その中に飛び込んだ。直線が続き速度が上がっていく。ゼロは出力を少しも緩めることなく突き進んだ。

大気圏内最高速度に手が届いたその瞬間、目先のサークルが忽然と消えた。ゼロはすぐに行動を起こす。

エンジンが体を起こす様に反転し、進行方向を向く。スラスターもブレーキとして尽力する。機首を上げ、攻め入る風を体全体で受けた。強靭な翼が軋み、心成しか叫び声が聞こえた。それでも仰向けになるまで上げ続けた。

その時、再びサークルが目に入る。エンジンを定位位置にし、直角を超えた急カーブを曲がりきった。高ぶった感情と機体を落ち着かせ、先へと進む。緩やかなカーブは翼で風の力を借りて、機体を操る。急なカーブは、ノズルの助けをもつてして、なるべくエンジンを可動させずに曲がりきる。

やつと試験の終了を表す赤いサークルを潜り、何とか一度のミスも無く、空での試験を終えた。次に待ち構えるのは、海中試験である。

『海中進入角度適正。進入速度まで減速』

『システム変更完了』

失速ギリギリの速度で海面に突つ込む。海の中は、抵抗が大きく翼が邪魔になる。加速性能は格段に下がり、方向転換にも時間差を生じる。アクロバットな動きを求めてきた道標にも疲れが見えた。ゼロは慎重に海中試験をこなした。最後の試験に臨むために空に舞い戻る。海水で濡れた機体がきらきらと輝く。海に別れを告げ真っ直ぐ、天を目指して突き進んだ。

『大気圏離脱開始。エンジン適正出力で維持』

重力から逃れる間、シェイルは他の準備にかかる。眼下に広がる建築物が小さくなつてゆく。あつと/or>間に、全てを飲み込む暗い宇宙に翼を広げた。淡い光を放つ星たちが一人を見守る。

慣性飛行で回つていると恒星の強い光の先にサークルが顔を見せた。サークルが生み出した道は、難解な迷路のように捻くれている。あらゆる妨げのない宇宙は、自由に動けるが、機体制御が難しい。そのことを証明するかのように絶えずスラスターが火を噴き、エンジンが上下に激しく踊る。

訓練以上の反応の良さにショイルは改めてゼロの凄さを感じた。
田まぐるしく、あらゆる計りが変化しショイルは異常が無いか目を光らせる。

飛行試験は何事もなく無事に終わり、帰還に向けて翻した。午後からのパワードースツの使用試験までにはまだ時間があつたため二人はゼロの自宅に戻ることにした。この時間帯、教育センター内の道りは少ない。人とすれ違うことが無いので、妙な緊張をしなくてよかつたし、何より試験後で歩きやすかつた。

「よつ。ゼロー。」

声と共に急に伸し掛かれ、ゼロはよろめく。

「つ。早くどこでくれ」

ディオネがクックと、笑いゼロに寄りかかった。

「俺らも今、終わったところだ。飯でも食いにいかねえか?」

「奢ってくれるのならいいが

両手を上げ、困った表情を見せる。

「冗談だろ。奢るほどの金なんて手元にねえよ」

「何かやらかしたな？」

「ミルがティオネをゼロから引き剥がす。

「はいはい。一銭も無いですよね。ティオネさん。……シェイルも聞いてよ。訓練でね、戦闘機を施設に思いつきりぶつけて、その請求で収入がパア。始末書を全部私に任せて、張本人はどこか遊びに行つたきり帰つてこない。どういうつもりなのかしら」

「いや～それほどでも」

有無を言わせずミルは拳を浴びせた。ティオネがその場で蹲る。腹を抱えながら、しぶしぶ歩くティオネを連れて食堂の赴いた。

「ところでゼロ、試験の相手知ってるか？」

「お前だ」

「……マジかよー。つうか、何で知ってる」

「はあ？ もしかしてあなた見てないの？」

一人は喧嘩が好きなのだろう。一度始まつた喧嘩は収まることを知らず、高まる一方だ。とばっちりを食らつ前に逃げ出そうとゼロとシェイルは休むことなく食を進める。

暖かい料理が冷めてしまつても繰り広げられる熱い戦いは終わりそうになかつた。

第6章・一つの壁？

パワードスーツの試験は非武装の格闘戦。2対2で行われ、合否は勝敗に左右されない。勝敗よりもペアの連係が評価される。

日が昇りきり、パワードスーツの試験時間が迫った。試験会場であるアリーナの一角に候補生たちは集められた。各班の教官が指揮を執る。

「それでは、今回の試験について説明を行う。試験は30分間の試合形式。事前に知らせた相手と戦つてもらいつ。試合は2対2で非武装状態。ダメージレベル3で強制終了となる。説明は以上。何か質問はないか？ それでは、五試合までの出場者はパワードスーツを装着し待機」

ゼロは三試合目だったので、余裕をもつてパワードスーツを着に更衣室に入った。準備が終わり、出番が回ってくるまでの間、試合を観戦する。

30分では、決着が着くわけがなく、どれも接戦したものばかりであった。見ていてもつまらないものであつたが、試験終了までアリーナから出ることは禁止されている。ゼロは頬杖をつき、ぼうつとしていた。それでも時間は刻々と過ぎて行き、ゼロたちの出番が回ってくる。

教官に呼ばれ、ゼロとシェイルはアリーナの中に入った。ドーム型のアリーナには、黒で身を包んだゼロたち四人がさびしく佇んでいる。

「三試合目を始める。両者構え」

異様な静けさが辺りを包み込む。始まりまでの一分一秒が永遠のようを感じられた。

「始め！」

始まりの合図と共に、ゼロは全速力で、ディオネに突っ込む。ディオネは飛び上がりそれをかわす。ゼロは火花を散らしながら体を止めた。

すぐに両足に力を込め、ディオネに迫る。ディオネは上がつてくるゼロに蹴りかかつた。ゼロは瞬時に交わし、スラスターで勢いづけた回し蹴りを華麗に決めた。続けざまに空中で大きくバランスを崩したディオネに追い討ちをかける。

ディオネは地面に強く叩きつけられた。次の一手から逃れるために、顔を上げるまもなく横に飛び退く。が、そこにはシェイルがいた。動く間もなく、拳が降りかかる。倒れ込む前に今度はゼロは右ストレートが顔面に入った。慌てて、コミルが二人の間に割つて入り、ディオネを逃がす。

気を取り直し、今度はディオネから攻撃を仕掛けた。隙が生まれないように、コミルと位置を常に確認しあう。ディオネは、ゼロとの距離を詰め寄るが、なかなか縮まらない。気付けば、ゼロの向かう先は明らかにシェイルの元。ゼロはなかなか決着の付かないこの戦いを混戦に持ち込むつもりであるう。ディオネはそう察し、コミルに遠ざかるように言つた。

素早くコミルがシェイルから離れる。しかし振り返つてもシェイルは後についてこない。ディオネの策略は間違つていた。ディオネは自ら2対1の状態にしたのだ。下がる前にゼロとシェイルが迫る。コミルが助けに向かうも間に合つ訳も無く、ディオネは圧倒的に不利な状態に置かれた。

ゼロとショイルの途絶えることのない攻撃に身を守ることさえできない。ゼロの戒心の一撃で吹き飛ばされたことで、やつと開放された。ユミルが駆け寄る。

『ディオネ、大丈夫?』

ディオネはしぶしぶ体を起こす。ゼロとショイルに動きは見られない。残り時間は5分を切つたところ。少しでも教官たちに良いところを見せなければならない。だが、すでに時間もなれば、気力もまつたく無かつた。

難攻不落の一重壁は未だに、一人の前で佇んでいる。1対1に持ち込むことが出来たとしても、返り討ちにあつだけ。事前の身体テスト結果では、ゼロとディオネの力差は歴然であるが、ショイルとユミルを比べるとユミルが上回つていたはず。そのことを思い出し二人まとめてか掛かれば、ゼロとシェイルに勝てるとまでは言わないが、大きな打撃を与えられるかもしれない。ディオネは短い言葉で作戦を伝えた。

ユミルの反応はとても悪かつたが何もしないわけにはいかなかつた。二人は呼吸を合わせ、動きを合わせゼロたちに挑みかかる。

「だあ〜くそつ。駄目だつた」

更衣室で大きく背伸びしたディオネが声を漏らす。丸々30分間戦闘を続けたもののディオネに見せ場は一度も訪れることがなかつた。パワードスーツを脱ぎ終えたゼロがディオネの隣でに腰を下ろす。

「お疲れ様」

「ひみせー。こんなにもつまむこかないとは」

ぼそぼそと嘆ぐティオネを残して、ゼロは更衣室から出て行った。続けれられている試験を横目にシェイルを待つ。夕時の穂やかな時間。姿を表さないシェイルに待ちくたびれて、ゼロは重くなつた瞼を閉じることにした。

「……ゼ、……ゼロ。起きる時間だ」

どいか懐かしい男性の声がする。何度も呼ばれるので、ベットから体を起こし目を開く。意識がはつきりする前に声の主から頭をガシガシ撫でられた。

「おはよう」

ゼロは男の顔も見ずにただ頷いた。再び眠りに付こうと体の力を抜くが、寝そべる前に男に抱きかかえられた。

そのまま男に連れていかれ、クッショーンが重ねられた椅子に座られる。湯気がたつ朝食を眺めていると、早く食べろと急かされた。扱いづらい長い箸を片手に、食器をそばに寄せせる。食べ進めるが一向に量が減らない朝食と格闘しているとさつきの男が様子を見に来た。男はしゃがんでゼロに視線を合わせる。

「昨日から、書類上でも家族の一員になつたわけだ。もつといひ、子供らしく振舞え。ん？ 違うか。……まあいい、飯はいいから着替える」

ゼロは、テーブルに箸を置く。男は車で待つてると、言い残し部屋から出た行つた。長く待たせる訳にはいかないので素早く着替え。しかし、一分も立たない内に声が掛かつた。今度は女性の声だ。

「ゼロ、…………ゼロ。起きて」

先程とは打つて変わって、たくさんの方声も耳に入つてくる。目を開けると、着替えを済ませたシェイルがいた。

「待たせてごめんなさい」

困った顔をしたシェイルにゼロは首を振る。

「いや、気にするな。夢を見ていたんだな」

「えつ、何？」

アリーナへの喚声でお互いに話しが良く聞き取れない。ゼロはシェイルの手を取る。

「子供の頃の夢を見た」

歩き出したゼロの表情からほ、気分は窺えない。

「ねえ、ゼロ。夢つて悪い夢じゃないよね」

シェイルがどこか心配そうな顔で見つめてきた。

「親父に起こされて、学校に行くまでの夢。もう随分会つてないから、懐かしかった」

ふと窓を見れば、沈み始めた日が空をオレンジ色に染めている。

「なら良かつた。早く帰ろ、ユオンが待ちくたびれちやう」

ショイルが歩みを速めるので、ゼロは手を引かれ、思いに更けかけていた思考が現実へと戻された。

第7章・傷ついた心は

無事に合格した候補生を歓迎したのは、以前にも増して厳しくなった訓練であつた。

走り難い荒れた大地に、体の水分を奪う灼熱が降り注ぐ。風は頬をなでるだけで、流れる汗は乾くことなく滴り落ちてゆく。幅の広い道に木々の陰は現れず、日の光からはどじゅつても逃れられない。

「走れ、走れ。もつとペースを上げろ！」

教官が絶えず叫び声を上げ、候補生たちを極限へと追い詰める。全員パワードスーツを装着し、それぞれ武装を身につけて走っていた。なぜか候補生だけは、フルフェイスを外し武器と一緒に身につけている。ゼロとディオネはお互いを励まし合いながら横並びになつて走っていた。

「駄目だ、もうだめ。ゼロ、俺死にそう」

「騒ぐな、また叩かれるぞ」

そう言つたゼロにも生き生きとした走りは見られない。刻まれる足音は皆バラバラで、舞う土煙はカラカラになつた咽喉を傷つけていく。

「本当、馬鹿げているよな。パワードスーツを着ていながら、使

うなど。それでいて、自分たちはパワードースツで走りやがつて
教官は決して、変わることのない力強い走りで後ろから付いてい
ている。機密性の高いパワードースツは、体内からあふれ出る熱を
保持し続け逃がさない。

「せめて、温度調節ぐらにはいいだろ。このままじや溶けちまつ
聞こえなかつたのか、ゼロは何も言わない。おい、ヒディオネが
ゼロの胸を叩く。

「何だ？ 黙つて走れ」

「おいおい、今は訓練中にグチれるチャンスなんだぜ」

やうこつして、教官がスピードを上げて迫つてきた。
一人は口を噤み、教官が通り過ぎるのを待つ。

「遅いんだよ。もっと走れ」

そいやつて、先頭まで檄を飛ばし終えると、また最後尾に戻つていぐ。ディオネは大げさに振り返り、教官が戻つたことを見るや否
や、しゃべつだした。

「なんやかんや言つてよ。ゼロ、お前は中量の武装だ。俺よりも
楽だら」

ゼロは鋭い目でにらみ返す。

「その重苦じこものはお前自身で選んだものだろ。わざわざ一番

重量のある武器にするのが悪いんだ。だがな、それでもずっと腕にへばりつかれて走るよりはましだ」

「へへん。お前も立派に文句言つてんじやん

夜明け前から始まつた身を削るこのマラソン。日中になり、気温はますばかりである。気晴らしに仰けば、たちまち口差しが体中を支配する。乾いた大地が熱風にのせて、しきりに水がほしいと嘆くが、与えられる水分は彼らから流れ出る汗しかない。

次第に真つ直ぐ走れなくなる者が増えてきた。ゼロも自分が教育センターのどこを走つていいのか分からなくなつていった。すぐ隣には、減らず口で有名なディオネがいるはずなのだが、気配が感じられない。さすがに心配になり、大丈夫か、と声を掛けてみたが、首を振られるだけだった。

歩みをやめるものが多く出てきたところでやつと休めの指示が出た。候補生たちは、迷わず地面に向かい崩れこむ。ゼロは肩で息をしながら、仰向ける。日差しをさえぎる黒く厚い雲がこの時はかりはとても優しく見えた。

呼吸が整い、はつきりと物事を考えられるまでに意識が戻つてきた。いまだに意識が朦朧としている候補生がいる中、ゼロは他人の心配し始めた。それは、お世辞でも体力があるとは言えないシェイルのことだった。

この訓練は二つのグループに分けて行われている。後の方であるシェイルは、今頃走り始めたところである。そんなゼロの不安を遮るかのように、教官が大声を上げる。

「もう、充分休んだだろ。この調子でいけば日が沈む前に走り終わる。ほら、立て走るぞ」

候補生たちは顔を見合わせ、空を見上げる。口は昇りきつてもいない。教官の言葉を素直に信じ、走り出す者がいる中、ディオネは地面に這いつぶばつたままだ。ゼロは教官に怒鳴られる「ことのないよう」ディオネを引っ張り上げた。

「最後まで一緒に走るといったのはお前だろ？」

「ディオネは首を振る。しかしそれは、否定の意味ではなかつた。

「仕方ないな。そこまで一緒に走りたいなら俺も頑張るか？」

ゼロは耳を傾けることなく、全力でその場を去つた。一人残されたディオネはぼやく。

「まつたく、ゼロは照れ屋さんだな。でも、まさかあいつに背中を押されるとは」

前触れもなく、ディオネの後頭部に激痛がはしつた。

「ナニが照れ屋だ。いいから走れ。それともお前だけ夜明けまで走るか？」

教官の存在をすっかり忘れていた自分を恨めしく思った。ディオネは頭を抑えながら、しぶしぶと姿が見えなくなつてしまつたゼロを追いかけるべく足を動かした。

翌日、候補生たちは昨日の疲れを癒せぬまま、戦闘機の格納庫に集められた。昨日の訓練は、体力強化という名目だけで、あのラン

一ингだつたので今日も想像を超える厳しい訓練が待つているだろうと皆、不安で一杯だつた。

その気持ちを知つてか知らずか予定より早く教官はやつてきた。

「昨日は、」苦労だつたな。それでは、今日の訓練について説明を行つ。」

教官の足元からブリーフィングのためのスクリーンが立ち上がる。

「今回の訓練はカリュキュラムどおりのものだ。昨日のような突拍子もない訓練だから安心してもいいぞ」

あの時とは違う教官だからといってここまでは違つのかとゼロは感心した。見るからに新米の教官のようだ。

「訓練内容は、いたつて簡単。グループ内での模擬戦闘そのものだ。訓練が2日間にわたつているのは、例年時間がかかるものだからな。この訓練の主な目的は、チームの特徴を知り、後に行われる他国の候補生との模擬戦において有利に戦つてもらつためだ。有意義な演習になるように心得ておくよ。分かつていてると思うが、先の試験で不合格者がでているため再編成されたグループもある。これを機に信頼関係も築いておけ」

幸いなことに、ゼロのグループは不合格者による変動はなかつた。

「今回の模擬戦闘では多くの制約がある。武装は、最低出力まで低下させたエネルギー機銃。演習用ミサイルの一種類だ。戦闘区域は第1～4演習場内。万が一、戦闘区域外へ出た場合はこちらに操縦が移され、強制帰還の措置をとる。以上で説明は終わりだ。質問があるものはいるか？ それでは解散。グループ1は戦闘準備に入

れ。30分後に開始する「

ゼロは受信した資料をおおまかに読み取った。演習予定開始時刻まで時間は十分にある。ゼロは強張つた体を気にしながら、シェイルと機体整備に足を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6631h/>

開拓者～神の力を持つ者たち～

2011年11月20日04時00分発行